別添資料 1

不登校の未然防止につながる
夢や希望を信じぬく人づくり

分析者

名古屋市立大学大学院

米川　和雄

目次

はじめに 2

全体的な傾向 3

総論１　大人に求められていること 8

総論２　学校に求められていること 11

各論１　友だちとの人間関係を土台にした教育 12

各論２　学校は「学校で大切にしていること」を子どもが求めてもよい場所 15

各論３　学校は、子どもが将来の夢や希望を信じるために求められる場所 17

各論４　大人から子どもたちに対話を求めるアウトリーチ 19

各論５　チーム学校を中心とした地域との連携 23

各論６　学校を子どもたちにとって「安心できるところ」「成長できるところ」に 27

夢と希望の推進モデル 36

はじめに

本調査は、足立区教育委員会が令和７年９月に実施した「学校生活に関する児童・生徒及び保護者アンケート」の回答を基に、不登校の未然防止の観点から、「夢や希望を信じ生き抜く人づくり（足立区教育大綱）」を目指すあり方について分析を行った。

学校が子どもたちにとって、「夢や希望を持てる」場所であって、「ウェルビーイングが向上する」場所であれば、

① 不登校はそもそも発生しないのではないか
② 発生しても長期化の軽減ができるのではないか
③ より学校と連携した欠席となるのではないか

という展望的な視点を持ち、【夢（将来の楽しみ）や希望を信じる視点】と【子どもたちのウェルビーイング向上の視点】に焦点を当て、これら２つを分析視点としている。

【夢（将来の楽しみ）や希望を信じる視点】

子どもたちが日々の「学校生活で最も大切にしていること」は、夢や希望の源泉となっているかもしれない。
この視点に基づき、本提言書では「子どもたちが学校生活で最も大切にしていること（「勉強」「友だち」「行事」「部活動」等という観点）を中心に、子どもたちの価値観が将来への展望にどう影響しているかを分析した。

【子どもたちのウェルビーイング向上の視点】

子どもたちの不安軽減と希望の創出は、子どもたちのウェルビーイング向上に寄与する重要な要素となり得る。
本提言書では、子どもたちの置かれた環境をより深く理解し、今後の教育マネジメントにおいて考慮すべき具体的な指針を導き出すため、学校生活の充実度に加え、将来のビジョンや不登校傾向を含む登校状況を分析の軸に据えた。

全体的な傾向

1　学校生活で「最も大切にしていること」の変化

全学年を通して「友達」と「勉強」が圧倒的多数を占めるが、学年が上がるにつれてその構成比が変わる。

（１）小学校低学年

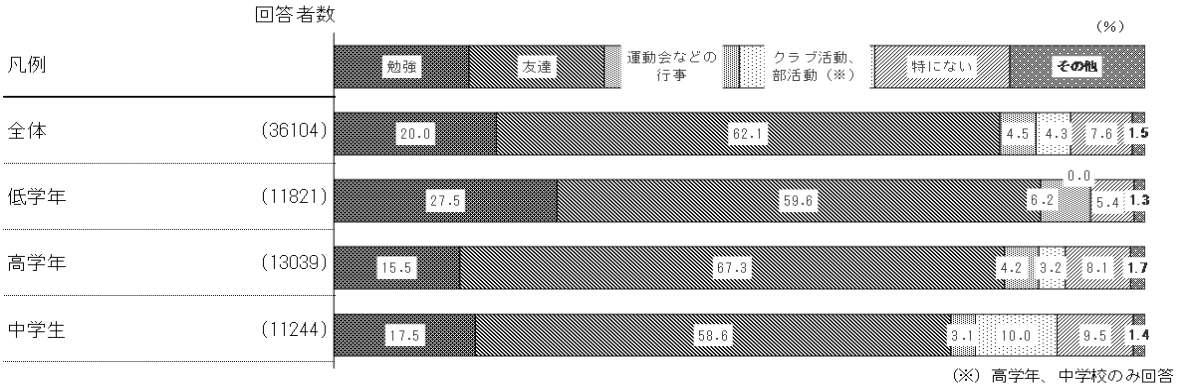
「友達」が 59.6%、「勉強」が 27.5%。中学生と比較して、「勉強」を大切にする割合が 10 ポイント以上高く、学習に対する意欲が強い時期といえる。

（２）小学校高学年

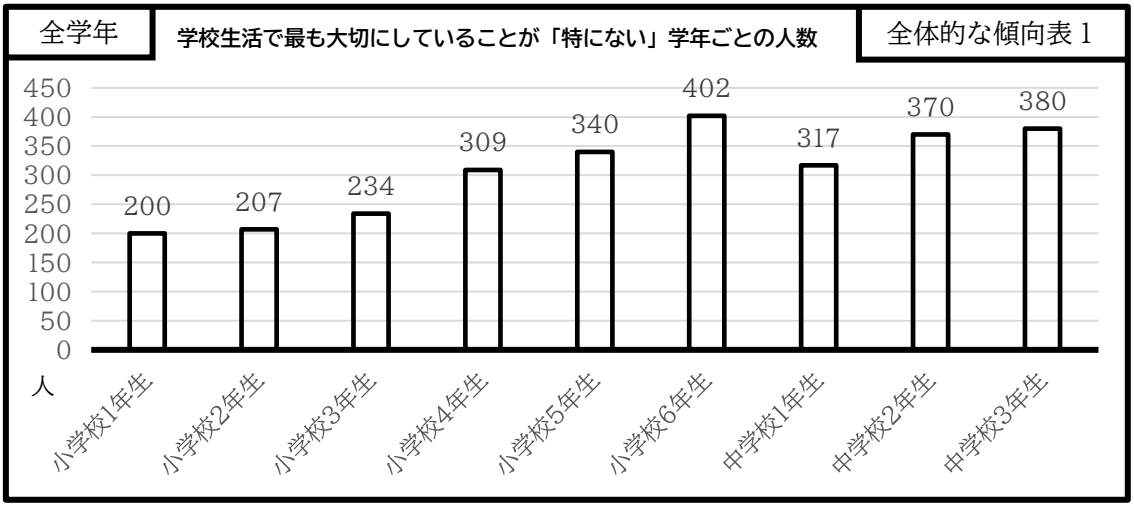
低学年と同様に「友達」と「勉強」が中心だが、卒業を控えた 6 年生では大切にしていることが「特にない」と答える児童が 1 年生の 200 人から約２倍の 402 人になる。

（３）中学校

「友達」が 58.6%と最多になり、「勉強」は 17.5%まで低下する。一方で「特にない」群は 9.5%に達し、小学校低学年（5.4%）から学年進行とともに増加する傾向が顕著である。



※　令和７年度学校生活に関する児童・生徒及び保護者アンケート報告書（単純集計）より抜粋



２　不登校に対する「ブレーキ」と「リスク」の違い

「友達」を大切にしていることが不登校を思いとどまらせる「ブレーキ」として機能する可能性がある点は小学校・中学校にて共通しているが、期待度数（理論上の予想人数）とのズレに違いがある。

（１）小学校低学年

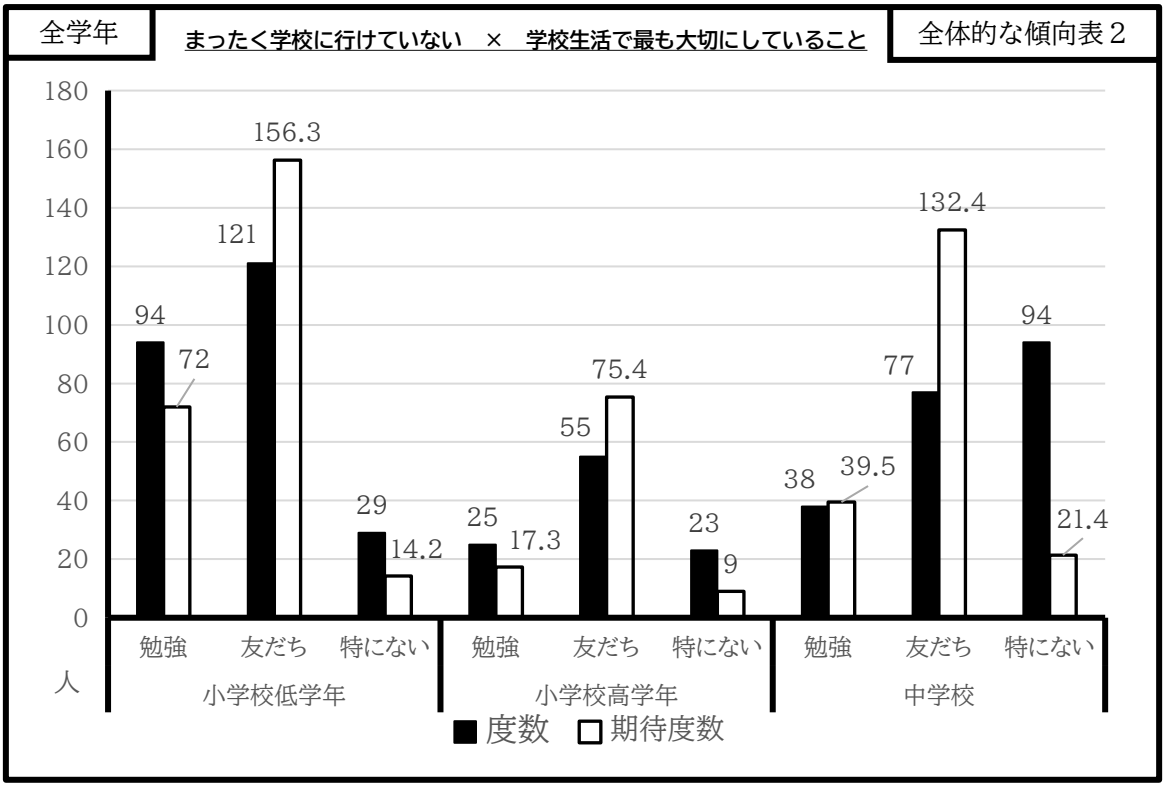
「友達」を大切にしている群は不登校が少ない（実際 121 人／予想 156.3 人）一方、「勉強」を大切にする群ですでに不登校が予想より多くなる（実際 94 人／予想 72 人）傾向が見られる。

（２）小学校高学年

「勉強」を大切にする群の不登校リスクがより鮮明になり、予想 17.3 人に対し実際は 25 人に達する。勉強だけが学校の目的になると、内容の難化や挫折が登校意欲を削ぎやすいことが推測される。

（３）中学校

「友達」のブレーキ効果が最も強く（実際 77 人／予想 132.4 人）、逆に「特にない」群の不登校リスクが極めて深刻化する（予想 21.4 人に対し実際 94 人と約 4.4 倍）。

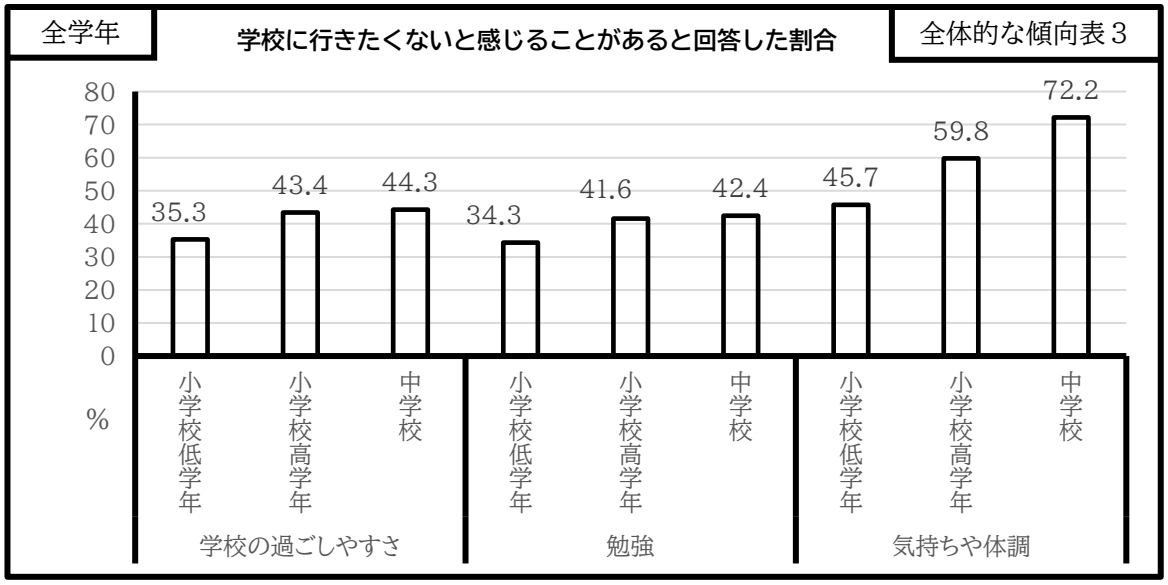


※　度数：人数　　期待度数：理論上の予想人数

次ページ以降同様。

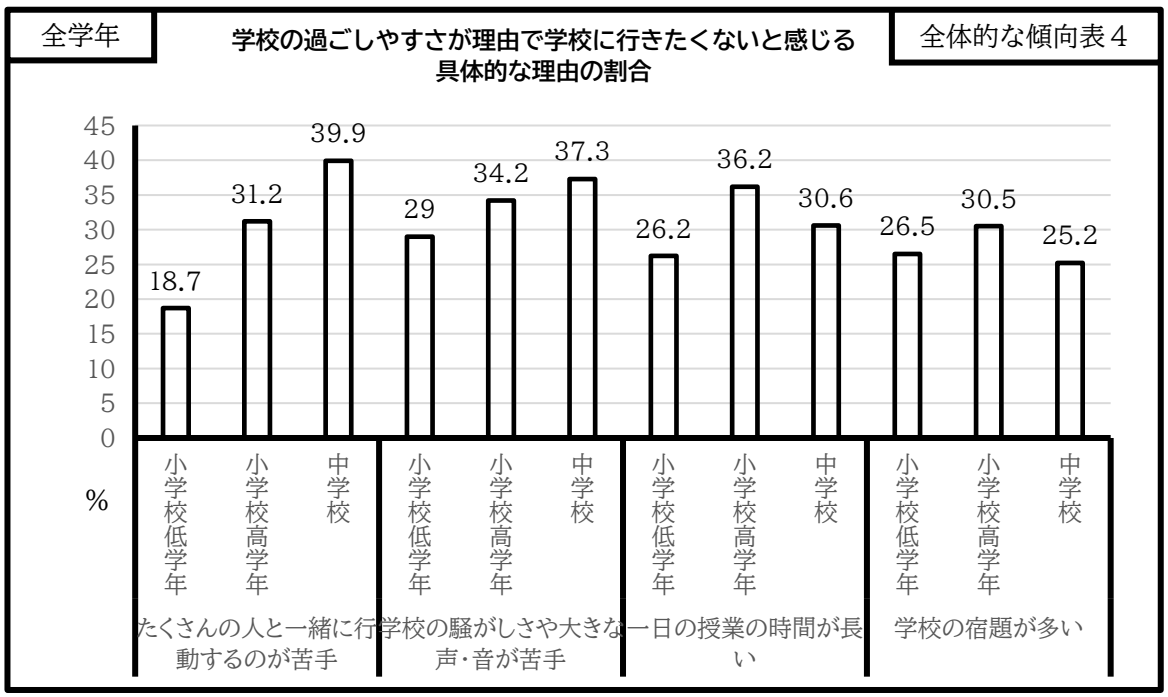
３　学校に行きたくない理由の具体性

クロス集計結果から、不登校（傾向含む）の児童・生徒の学校に行きたくない理由に着目すると、学年が上がるにつれて、「学校に行きたくないと感じることが『ある』」の回答率が上がっていくが、中でも「気持ちや体調」と「学校での過ごしやすさ」「勉強」が多く見受けられた。



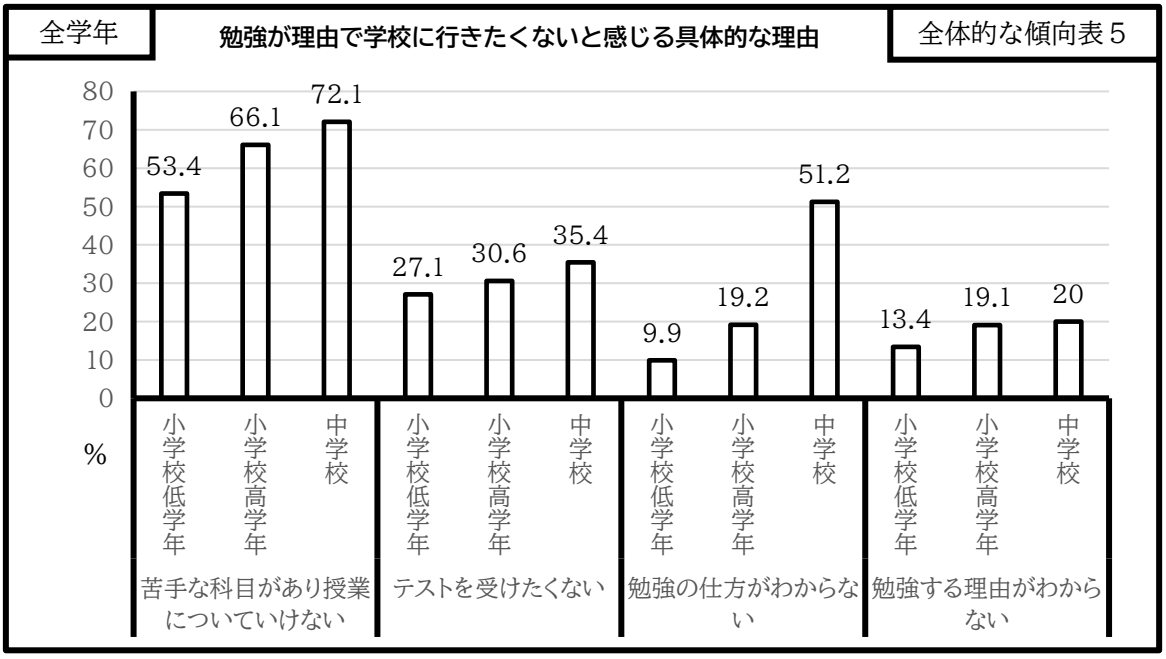
（１）学校での過ごしやすさについて

全体の傾向として「一日の授業の時間が長い」「学校の宿題が多い」の回答が多いが、中学校になると、回答が小学校高学年と比べて減少する。一方で、「たくさんの人と一緒に行動するのが苦手」「学校の騒がしさや大きな声・音が苦手」は小学校低学年から高学年、中学校へと漸増していく傾向がある。



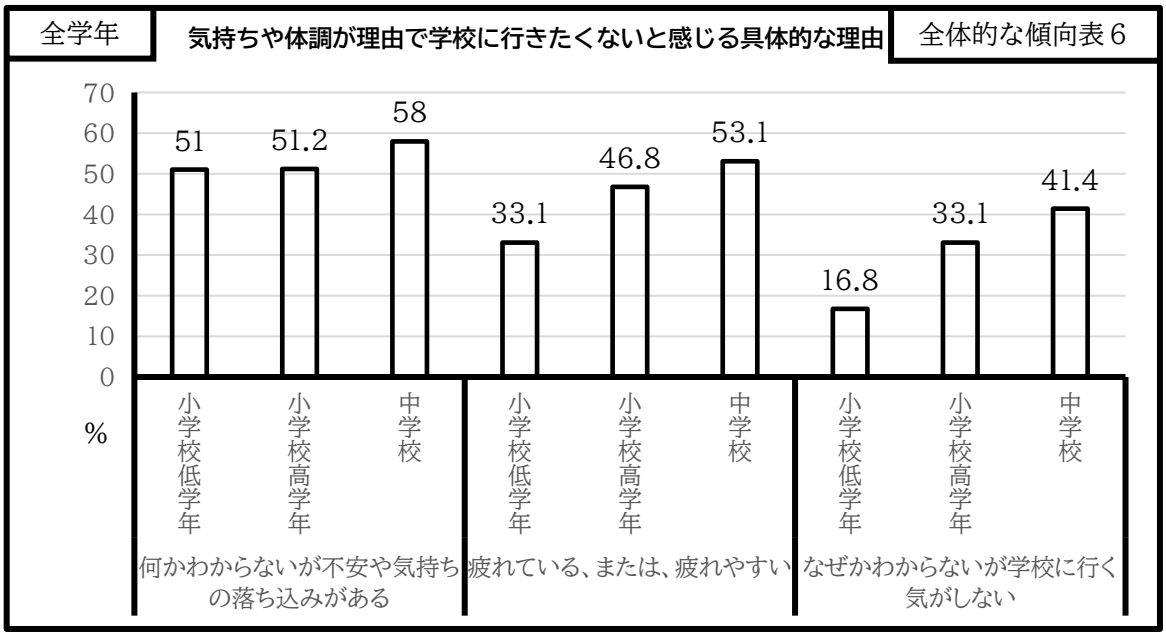
（２）勉強について

どの学年においても「苦手な科目があり、授業についていけない」の回答が多くを占める。特に中学校では 72.1%に及ぶ。さらに、「勉強の仕方がわからない」については小学校と中学校を比較すると２倍以上の差がある。

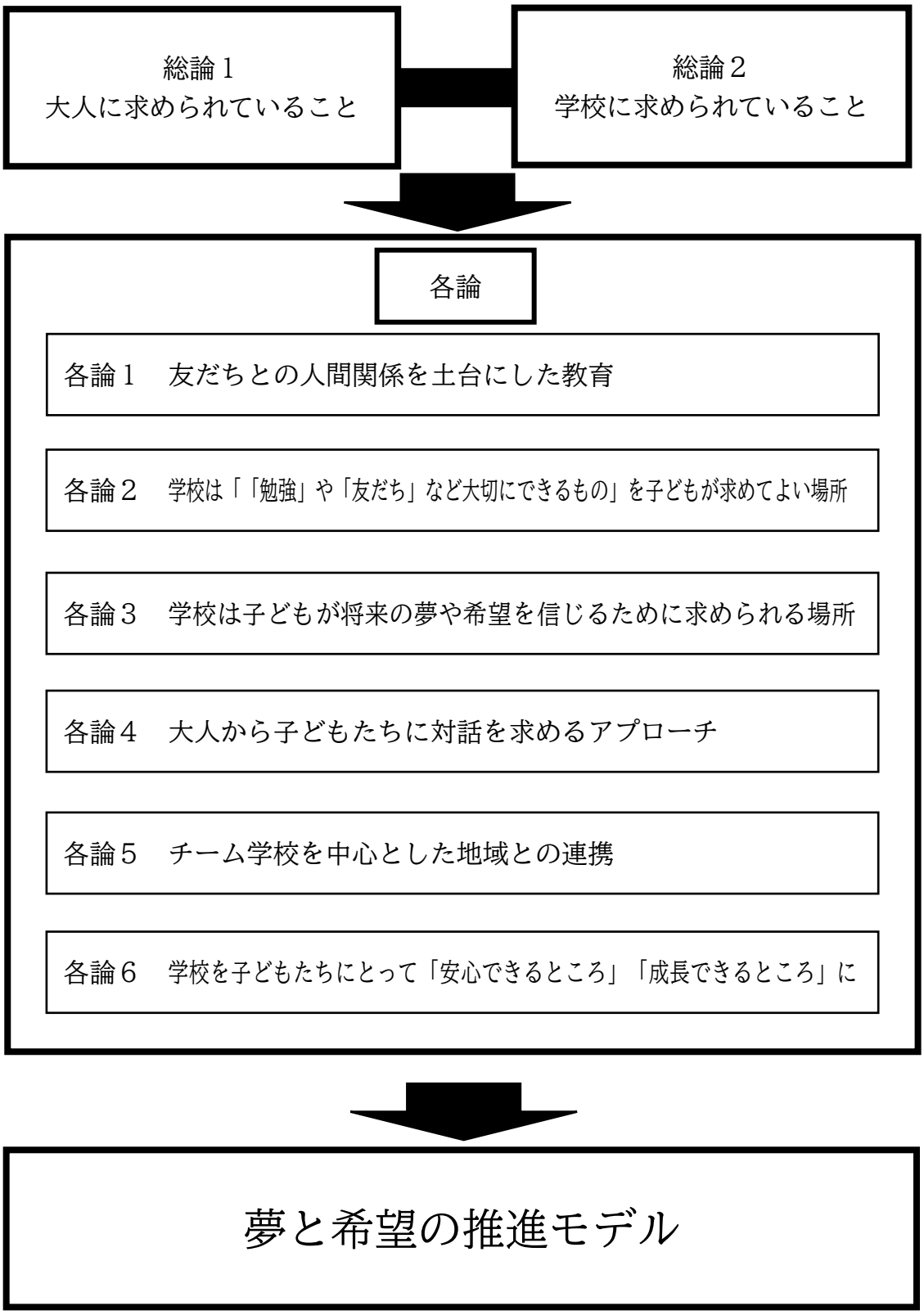


（３）気持ちや体調について

「何かわからないが不安や気持ちの落ち込みがある」「疲れている、または、疲れやすい」の回答が多く、学年が上がるにつれて漸増している。また、「なぜかわからないが学校に行く気がしない」も漸増しているが、小学校低学年と中学校を比べると２倍以上の差がある。



以上を前提に、以下の全体像で本提言書は構成されている。
　総論１～２を基幹とし、各論１～６、夢と希望の推進モデル、で構成する。



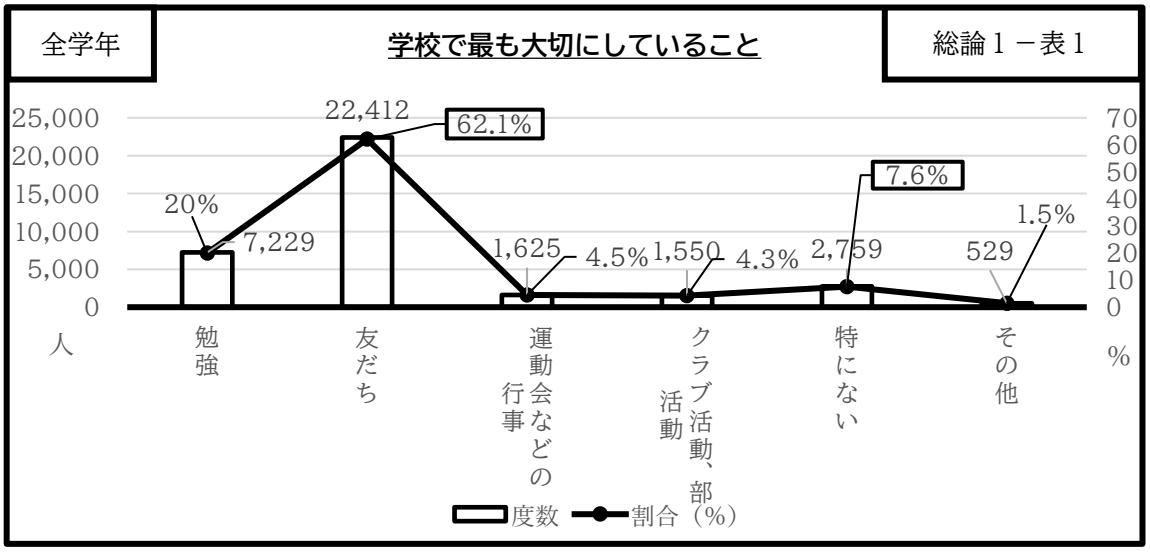
総論１　大人に求められていること

子どもに夢（将来の楽しみ）や希望を持たせること、子どものウェルビーイングを実現するには、「大人がどうあるべきなのか」を「大人が議論」する必要がある。

１　「子どもたちが学校生活で最も大切にしていること」の分析の意味

「子どもたちが学校生活で最も大切にしていること」に焦点を当てて分析を行うと、「子どもたちが学校生活で最も大切にしていること」と「子どもたちが学校へ行く意欲」には何かしらの関係性があることがわかる。

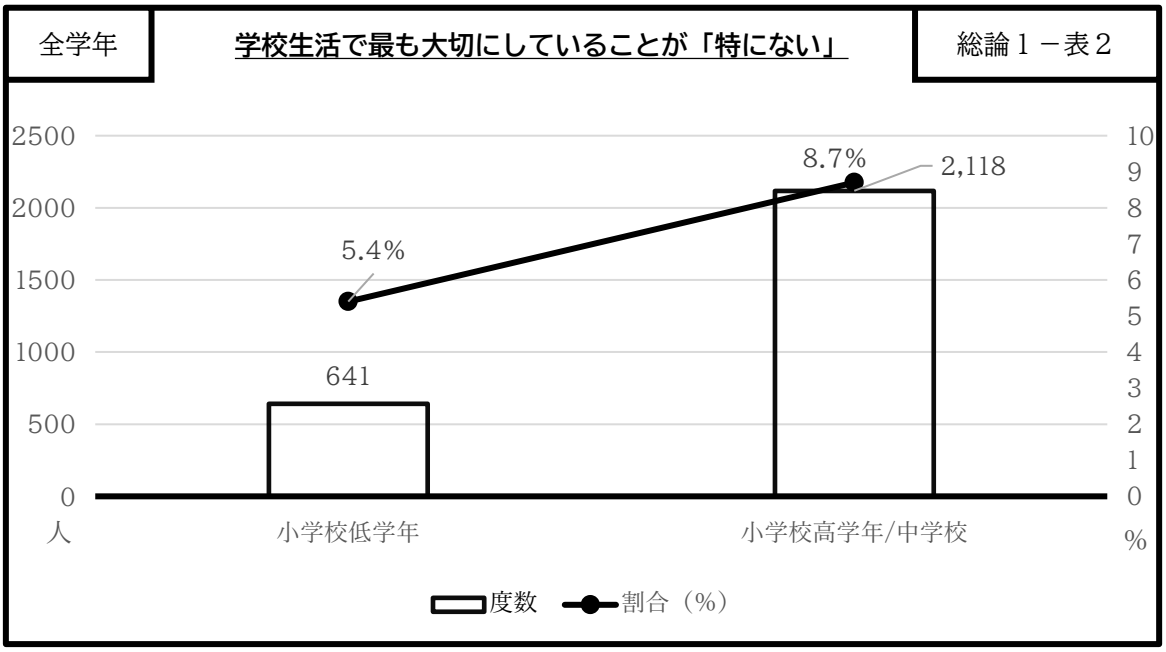
よって、「子どもたちが学校生活で最も大切にしていること」を分析する妥当性があると言える。



総論１－表１　分析結果

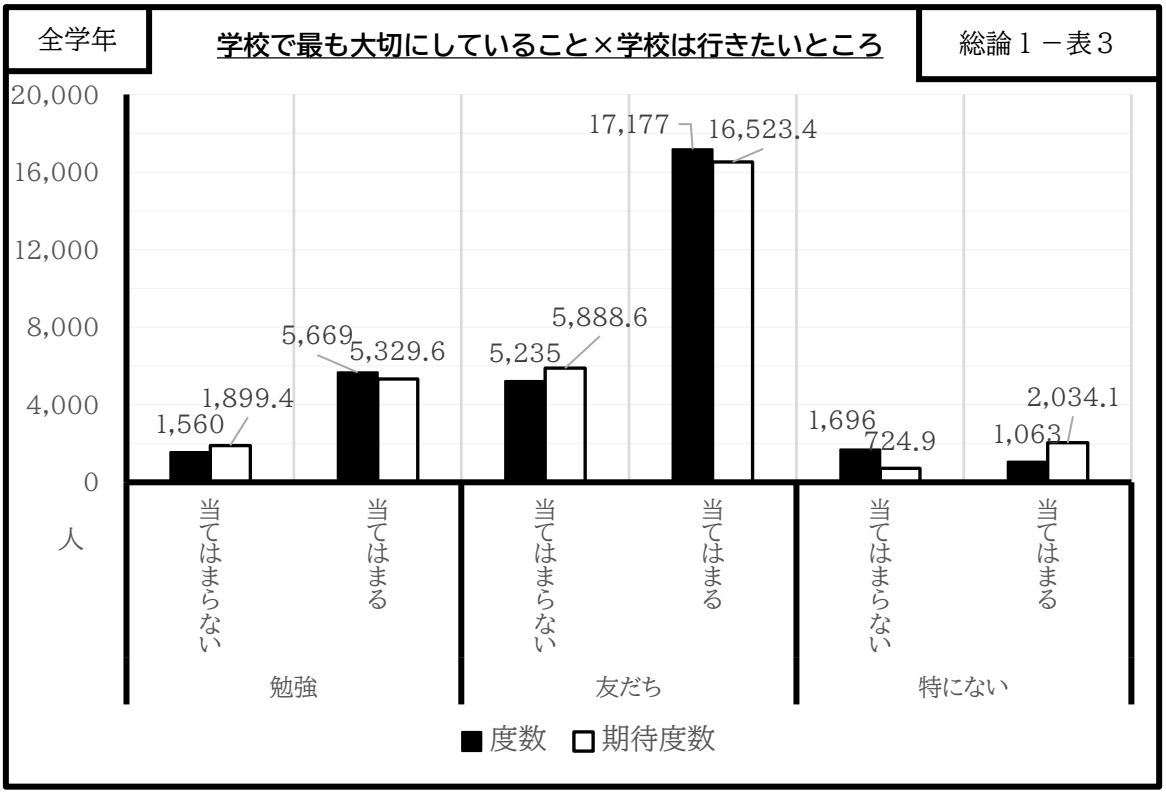
（１）学校生活で最も大切にしていることが「友だち」が 62.1%と最も多い。

（２）「勉強」も 20%であるが、「特にない」が 7.6%と第三群として存在している。



総論１－表２　分析結果

学校生活で最も大切にしていることが「特にない」と回答する割合は、学年が上がるにつれて漸増していく。



総論１－表３　分析結果

（１）「勉強」や「友だち」と回答した子どもは、度数（人数）が期待度数よりも多く、「勉強」や「友だち」が「学校に行きたい」と思える要因となっている可能性がある。
（２）「特にない」と回答した子どもは、度数（人数）が期待度数よりも少なく、「特にない」が「学校に行きたくない」と思ってしまう要因となっている可能性がある。

３　所見

割合的には「特にない」は少ないが、全体の第３群であること、漸増していくことから、この「特にない」群に注目したい。

現状の教育支援が、子どもたちの「学校生活で最も大切にしていることの選択における意欲の喪失」を招いている一側面は否定できない。以下の問いについて大人が議論を深めることが不可欠である。

「子どもが未来に希望を持つために、大人はどう振る舞うべきか？」

この本質的な対話こそが、不登校支援の鍵となるだけでなく、すべての子どもたちの不登校を未然に防ぐ土台となり得る。

総論２　学校に求められていること

総論１－表１から、「子どもたちが学校で大切にしていること」が「友だち（６２．１%)」「勉強（２０%)」と示された。

このことから、教員には「人間関係やクラスを育てるプロ」としてのスキルが、学校には「質の高い学習（学び）（※１）を提供する場」としての機能が求められる。

※１　質の高い学習（学び）は「教科」だけでなく、「人間関係からの学び」「個々の子どもの状況に合わせた学び」なども含む。

１　所見

（１）教員に求められる「人間関係やクラスを育てるプロ」としてのスキル

ア　人権教育の核：肯定的な自他尊重の理解

多様な価値観が共存する社会を生き抜くためには、自己と他者の双方を等しく尊重する姿勢が不可欠である。教員は子どもたちの多様性を尊重し、この「自他尊重」の重要性を教育の土台として認識する必要がある。

イ　クラスづくりの目的：共生社会への視点の育成

学級は、他者との交流を通じて多様な生き方や選択肢を学ぶ貴重な場である。教員には、他者と対話しながら歩む方法を子どもたちに熟考させ、将来の共生社会を支える一員としての視点を育むための環境設計が求められる。

（２）学校に求められる「質の高い学習（学び）を提供する場」としての機能

学校は、子ども・友だち・先生が関わり合う場所である。

学校の役割は、子どもたちに試行錯誤の場をつくり、「わかった！」「できた！」という達成感から自信を育てることが挙げられる。この成長プロセスには豊かな人間関係が欠かせないため、人間関係から学びを深める「学校づくり」が不可欠なのである。

ただし、人間関係の形は一人ひとり異なる。個性に合わせ、時には「一人で集中して学ぶ」ことも大切な選択肢であろう。例えば、音が苦手な子にイヤーマフを認めるなど、誰もが自分に合ったスタイルで学び、成長できる環境を整えることが求められる。

各論１　友だちとの人間関係を土台にした教育

仮説１　「友だち」が不登校予防に寄与するか

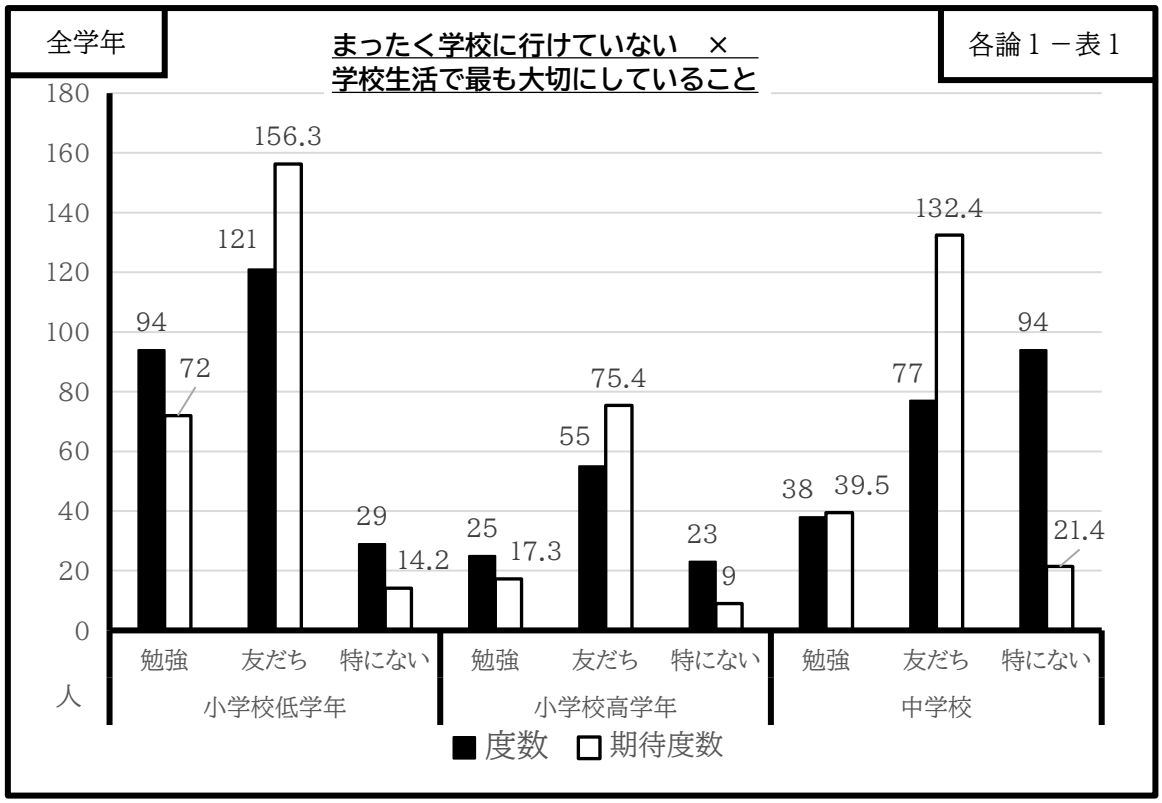
（１）「友だち」の大切さと不登校予防について

人間関係を築ける土台がある学校だからこそ、「学校生活で最も大切なもの」として「友だち」を挙げた子どもは、実際に学校に通えている割合が高い（期待度数を上回る）と考えられる。逆に、不登校傾向にある子どもではその割合が低くなる（期待度数を下回る）はずである。

つまり、「友だち」の存在が不登校を防ぐ大きな要因になっていると予測できる。特に「勉強」は進学のために「やらなければならない」側面が強いが、「友だち関係」は自分の意思で築ける部分（裁量）が大きいため、よりその傾向が強く表れるはずである。

（２）「特にない」を選択した子どもの傾向について

一方で、学校生活に求めるものが「特にない」と答えた子どもは、学校に行く目的を見出しにくい状態と言える。そのため、実際に学校に通えている子どもの数は、統計上の予測（期待度数）よりも少なくなると考えられる。



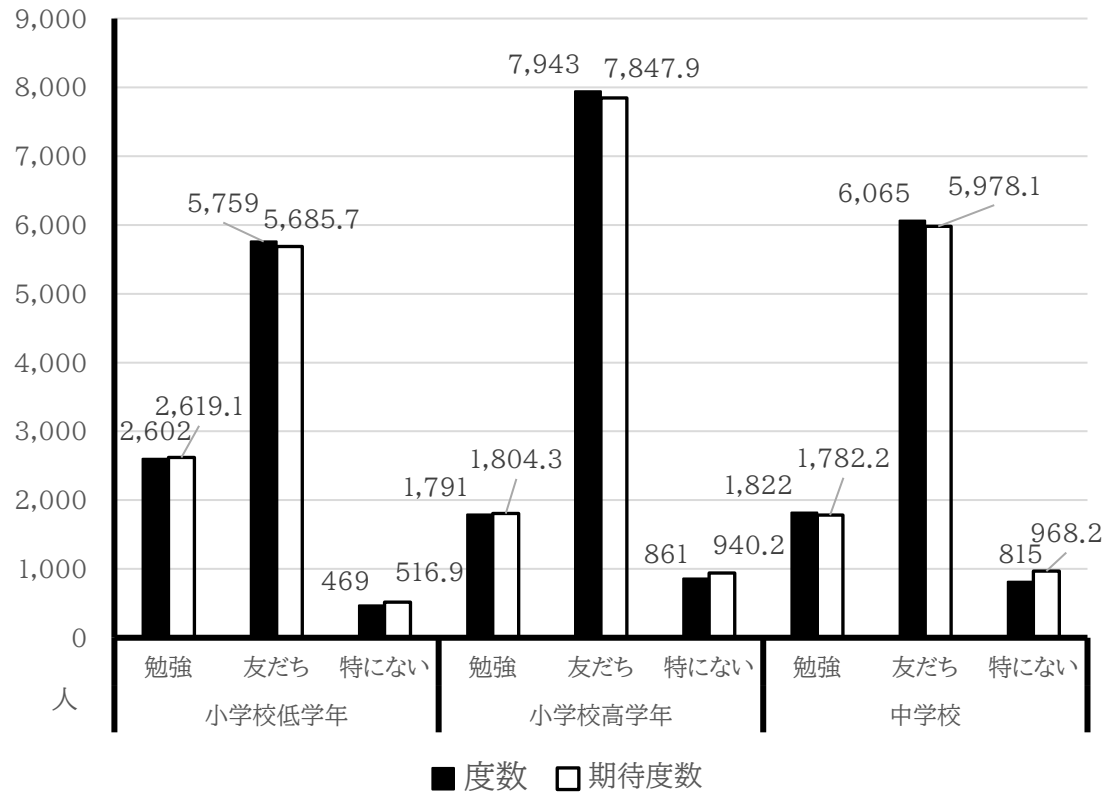
各論１－表１　分析結果

（１）学校生活で最も大切にしていることが「友だち」と回答した子どもは、全学年において、度数（人数）が期待度数よりも少ない。
（２）「特にない」と回答した子どもは、度数（人数）が期待度数よりも多い。
（３）小学校低学年、高学年において「勉強」と回答した子どもは、度数（人数）が期待度数よりも多い。

全学年

学校に行けている　×　学校生活で最も大切にしていること

各論１－表２



各論１－表２　分析結果

（１）学校生活で最も大切にしていることが「友だち」と回答した子どもは、全学年において、度数（人数）が期待度数よりも多い。
（２）「特にない」と回答した子どもは、度数（人数）が期待度数よりも少ない。

結論１　仮説（１）、（２）を概ね支持。「友だち」は不登校予防に寄与。

１　所見

分析結果から、「友だち」との人間関係が不登校予防に寄与することがわかった。従って、「友だちとの人間関係」を土台にした教育が求められる。

（１）教育機関としての学校の優位性

学校の最大の強みは、地域という枠組みの中で多様な人間関係を提供し、子どもたちの個々の価値観（大切にしたいこと）を育める点にある。

この学校の優位性を、学校に関わる人全てが認識する必要がある。

（２）中学校生活への円滑な移行と興味の拡大

小学校における肯定的な対人関係は、中学校進学後の活動を後押しするエネルギーとなる可能性がある。早期から学校行事や部活動への関心を高め、それらが子どもにとって魅力的な選択肢となるよう、学校は教育の価値をデザインし、伝えていく必要がある。

（３）学習面における不登校要因の分析

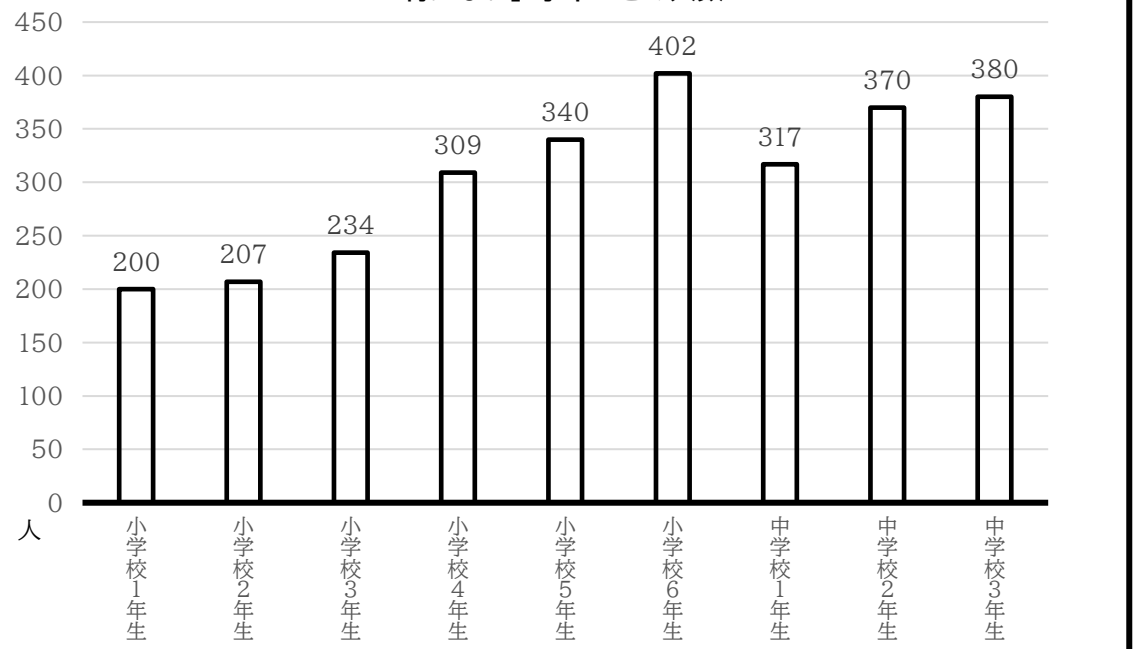
調査の結果、「勉強を重視する層」において、不登校者数が統計上の予測を上回る可能性が示唆された。学習内容への理解不足や挫折が、想像以上に強く登校意欲に影響している可能性を考慮した支援が求められる。

各論２　学校は「学校で大切にしていること」を子どもが求めてもよい場所

仮説２　高学年ほど「学校生活で最も大切にしていることが『特にない』が減少するか。

自身の考えや気持ちを理解し表現できていく高学年ほど､「学校生活で最も大切にしていることが『特にない』」が減少することが予測される。

全学年



各論２－表１

各論２－表１　分析結果

自身の考えや気持ちを理解し表現できていく高学年ほど、「学校生活で最も大切にしていることが『特にない』」が漸増する。

結論２　仮説２を不支持。学年が上がるほど『特にない』者が増加。

１　所見

学校生活を経験する中で「大切にしたいものが特にない」と感じる子が増えているのだとしたら、大人は「夢や希望を信じられる学校」のあり方を真剣に考え直す必要がある。

まず大人は、子どもたちに「大切にしたいものが特にない」と思わせてしまっていた現状について共通認識を持った方がよいだろう。

その上で、「勉強でも、友だちでも、行事でも、何かを全力で求めていいんだよ」と伝え続けていく姿勢が求められる。

そして、子どもが手を伸ばしたとき、学校が精一杯それに応えられる場所で

ある必要がある。

（１）大人たちがつながり、子どもを支える社会へ

子どもの変化に大人一人が立ち向かう必要はない。多様な大人が連携し、子どもたちの主体性を信じて支え合う「共生社会」を目指す必要がある。

（２）大人も子どもも、共に幸せであること

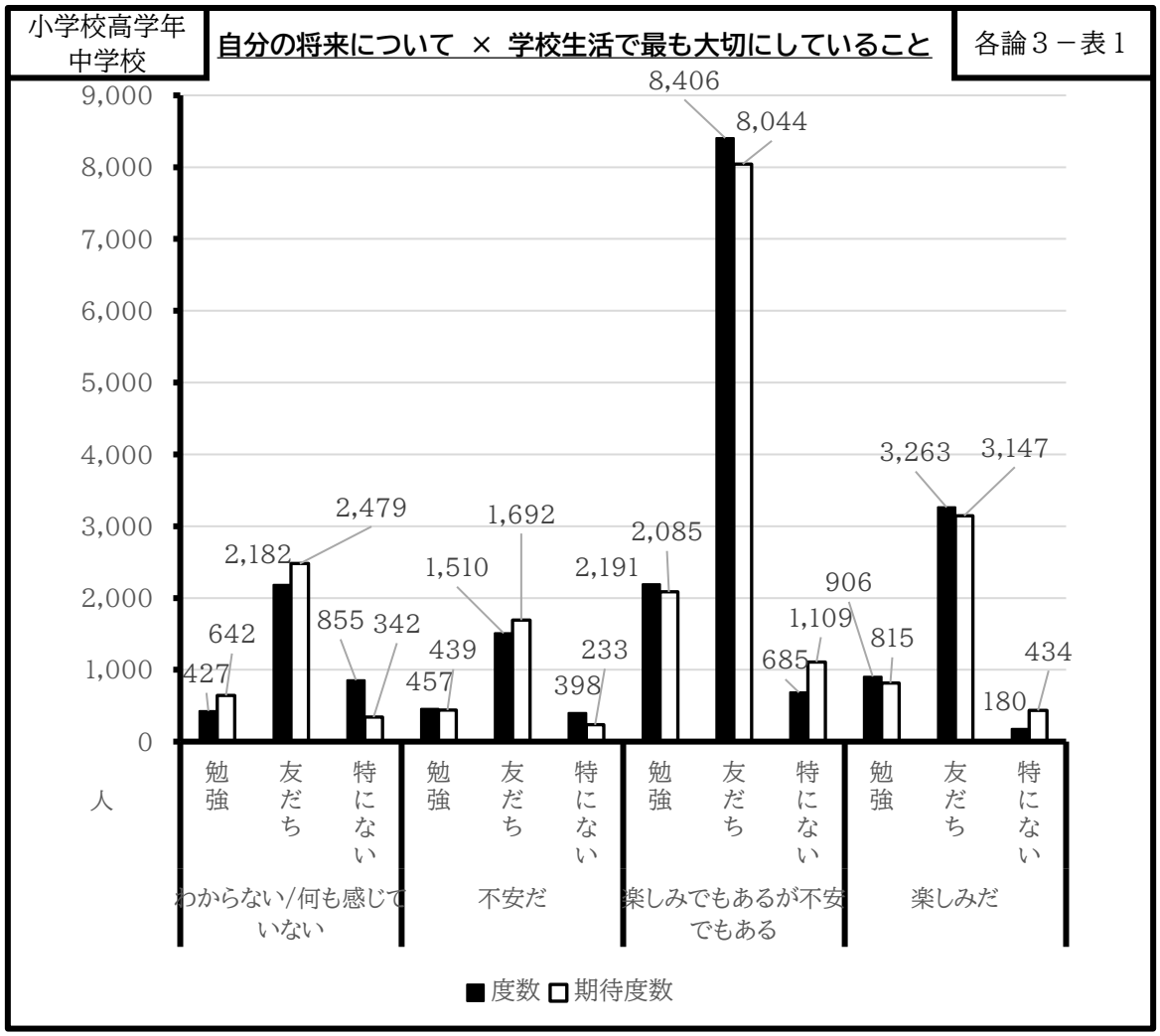
子どもが夢を信じられる社会とは、大人が夢を持って生きている社会である。誰かの幸せを犠牲にするのではなく、足立区基本計画及び足立区教育振興ビジョンが掲げるように、社会全体で「ウェルビーイング（幸せ）」を高めていく視点が不可欠である。

各論３　学校は、子どもが将来の夢や希望を信じるために求められる場所

仮説３　将来への楽しみ、不安に差が生じるか

（１）「学校生活で最も大切にしていること」で「友だち」「勉強」を選択した場合、「自分の将来についてどのように感じているか」のうち「楽しみだ」「楽しみでもあるが不安でもある」を選択した者が、期待度数よりも多くなると予測する。

（２）逆に、「学校で最も大切にしていること」が『特にない』場合（学校生活を通じてそうさせてしまっている可能性もあり）、その子どもたちは「自分の将来についてどのように感じているか」のうち「不安だ」「何も感じていない」「わからない」を選択した者が期待度数よりも多くなると予測する。



※　「自分将来についてどのように感じているのか」は、小学校高学年、中学校のみが回答。

各論３－表１　分析結果

（１）学校生活で最も大切にしているものを「勉強」「友だち」と回答した場合、自分の将来について「楽しみだ」「楽しみでもあるが不安でもある」と回答した子どもが、期待度数よりも多くなる。
（２）「学校で最も大切にしていること」が『特にない』場合、「不安だ」「何も感じていない」「わからない」と回答した子どもが期待度数よりも多くなる。
（３）「勉強」「友だち」が将来への楽しみに、「特にない」が将来への不安に関係している可能性がある。

結論３　仮説３（１）（２）を支持。「友だち」の一貫した肯定的な数値

１　所見

分析から、学校で「友だち」を大切にしている子どもほど、将来への不安が少なく、期待（楽しみ）を抱きやすい傾向が見えてきた。一方で、大切にしていることが「特にない」という子どもは、将来に対して強い不安を感じる傾向にある。

この結果は、学校がすでに「子どもの夢や希望を支える場」として機能していることを裏付けているが、この機能をさらに強めるためには、学校が何を提供できるのかを広く発信して、子どもの願いに柔軟に応えられる学校環境を整えていく必要がある。

（１）「学びの場」である前に「安心できる場」であること

学校は子どもたちの心が安らぐ「居場所」でなければならない。単に知識を詰め込むだけの場所では、学校の真の強みは発揮できていないのである。

子どもに「何ができるか」を求める前に、まず「ありのままの自分でいていい」と思える安全・安心な土台を築くことが重要である。

各論４　大人から子どもたちに対話を求めるアウトリーチ

仮説４　「誰かに相談する」行為は「将来の楽しみ」の資源となるか。

（１）孤立と意欲の欠如の関連性

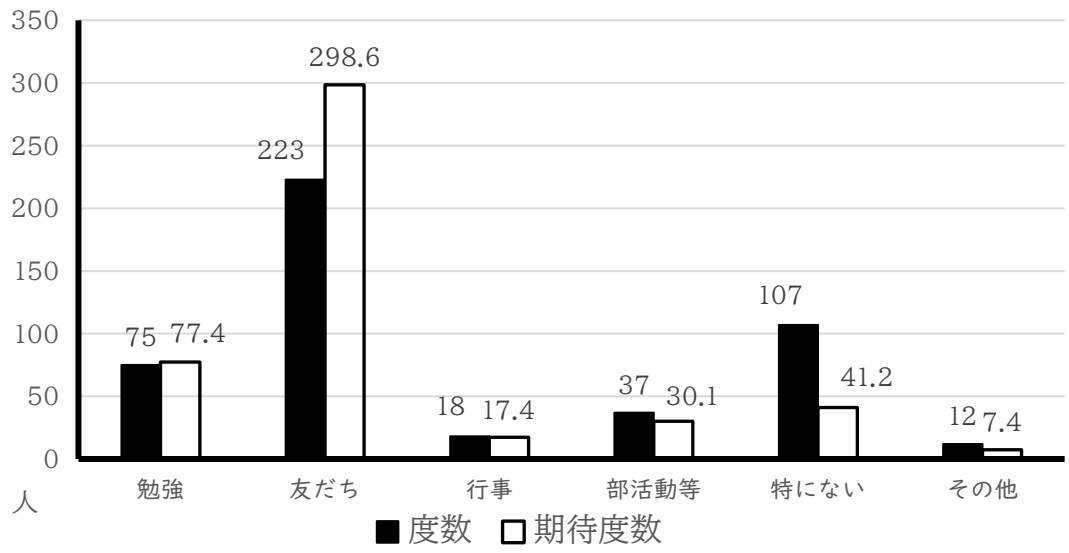
学校で大切にしていることが「特にない」子どもは、他者との関わりが希薄である可能性が高い。そのため、困ったときに「相談したくてもできない」と感じる割合が期待度数より高く、実際に相談できる人数も少ないと予測する。

（２）相談相手の存在が将来への希望を支える可能性

たとえ学校生活に目的を見出せていない生徒であっても将来に「楽しみ」や「期待」を感じている場合は、「相談できる相手」がより多く存在していると予測される。つまり、周囲のサポートが将来への前向きな姿勢を支える鍵となっていると考えられる。

小学校高学年
中学校

各論４－表１



各論４－表１　分析結果

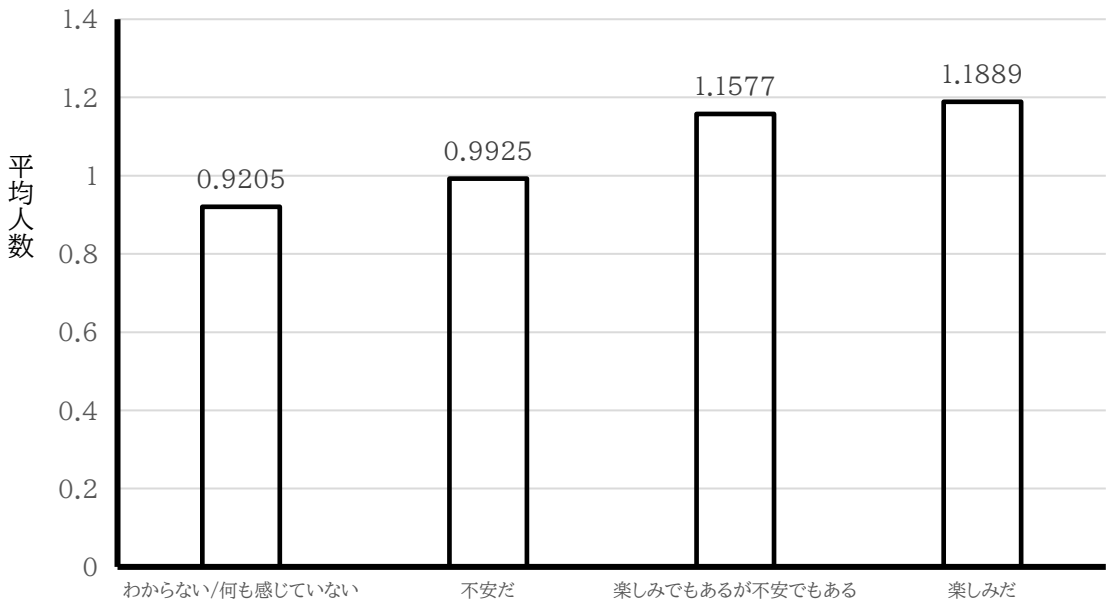
（１）「勉強」や「友だち」と回答した子どもと比べ、「特にない」と回答した子どもの度数（人数）は期待度数よりも多い（２倍以上）。

（２）「特にない」子どもは、「相談したいが誰にも相談できない」人が多く存在している可能性がある。

小学校高学年
中学校

**学校生活で最も大切にしていることが「特にない」×
相談した人数×
自分の将来についてどのように感じているか**

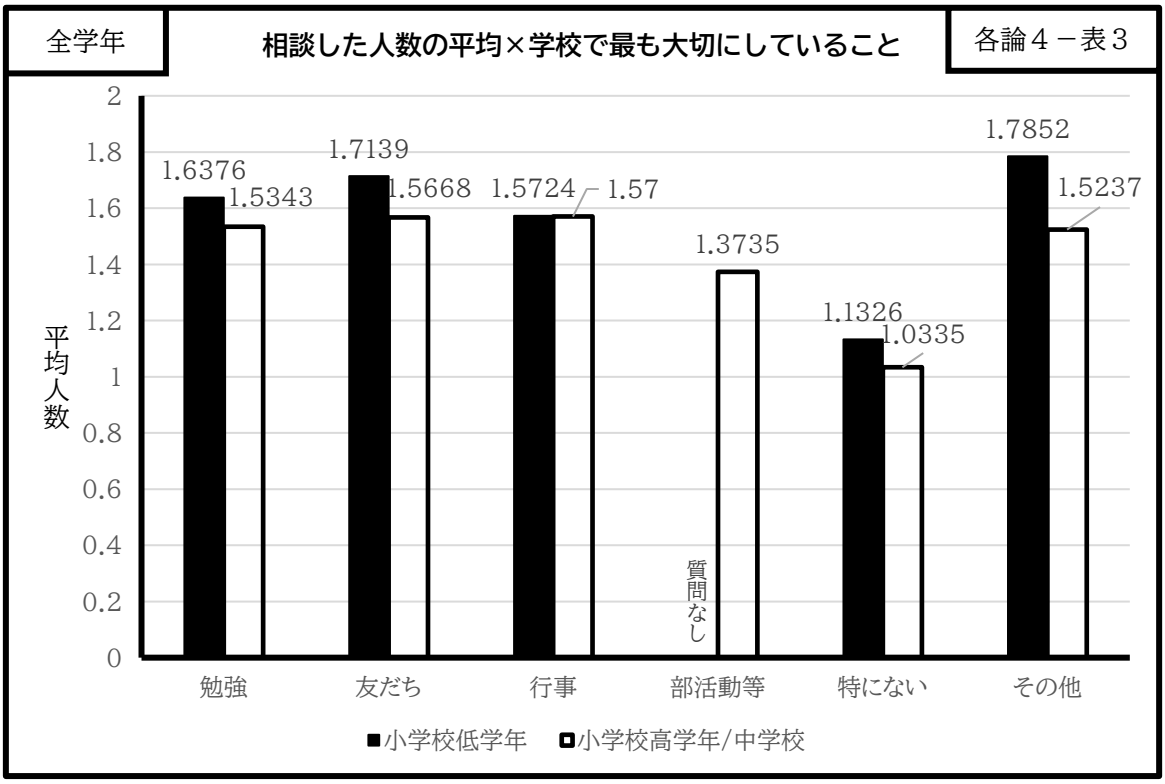
各論４－表２



※　「自分将来についてどのように感じているのか」は、小学校高学年、中学校のみが回答。

各論４－表２　分析結果

（１）将来を「楽しみ」に感じている子どもは、周囲に相談できる人数が１人以上存在している。
（２）将来を「不安」「わからない/何も感じていない」と感じている子どもは、周囲に相談できる人数は１人を下回っている。
（３）周囲の人が子どもにアプローチすることで、子どもに将来の「楽しみ」を与えることができる可能性がある。



各論４－表３　分析結果

（１）「特にない」と回答した子どもは、学校内で相談した人数の平均が最も低い。
（２）「特にない」と回答した子どもの周囲には、「勉強」や「友だち」などと回答した子どもに比べて学校内で相談できる人が少なく、悩みなどを打ち明けられていない可能性がある。

結論４　仮説４（１）（２）は概ね支持。大人のアウトリーチ/キャリア教育が重要

１　所見

「学校生活に大切なこと（例えば、価値とも言えよう）を見出せない状態」は、そのまま「自身又は他者への不信、孤立」につながるリスクがある。自らSOSを出せない子どもたちに対し、学校が多様な相談窓口（信頼できる大人の存在）を備えたセーフティネットであることを戦略的に周知して相談のハードルを下げる環境づくりをしていく必要がある。

一方で、将来をポジティブに捉えている子どもほど、学校内に多くの相談相手を持つ傾向にある。これは「自分の人生を楽しみたい、つまり大切にしたい」という思いが、他者の助けを借りるエネルギーになることを示唆している。学

校への帰属意識が低い子どもであっても、自身の将来にだけは関心を持てるよう、将来展望（希望）を「他者との関わり」の呼び水にして大人が手を差し伸べる（アウトリーチする）姿勢が不可欠である。

（１）アウトリーチの徹底

孤立している子は目に見えにくい。特定の子だけでなく、全ての子どもに対して「“大人が”あなたのことを見守っている」という対話の姿勢を示すことが重要である。

（２）キャリア教育の再定義

キャリア教育においては、自分の長所ややりたいことから、より高学年になれば、それを活かせる方向性を見つめることに加え、「自分は人としてどうありたいのか」「どのようなことに人の優しさや温かさを感じるのか、感じたいのか」、そして「それができるような自分になれるのか」というような「自己のあり方」を見つめ、職業の不安と同等以上に自己の不安を期待へと変え、孤立を防ぐ心の土台をつくっていける可能性がある。

各論５　チーム学校を中心とした地域との連携

仮説５　学校での相談対応から漏れている子どもがいるのではないか。

（１）「施設やサービスを１つでも利用していた、または利用している」子ども（小学校高学年、中学校）ほど、「学校生活で困ったときに学校の中で相談したことがある」と予測する。例えば、養護教諭（保健室の先生）、SC に相談する子どもが期待度数よりも多くなること予測する。

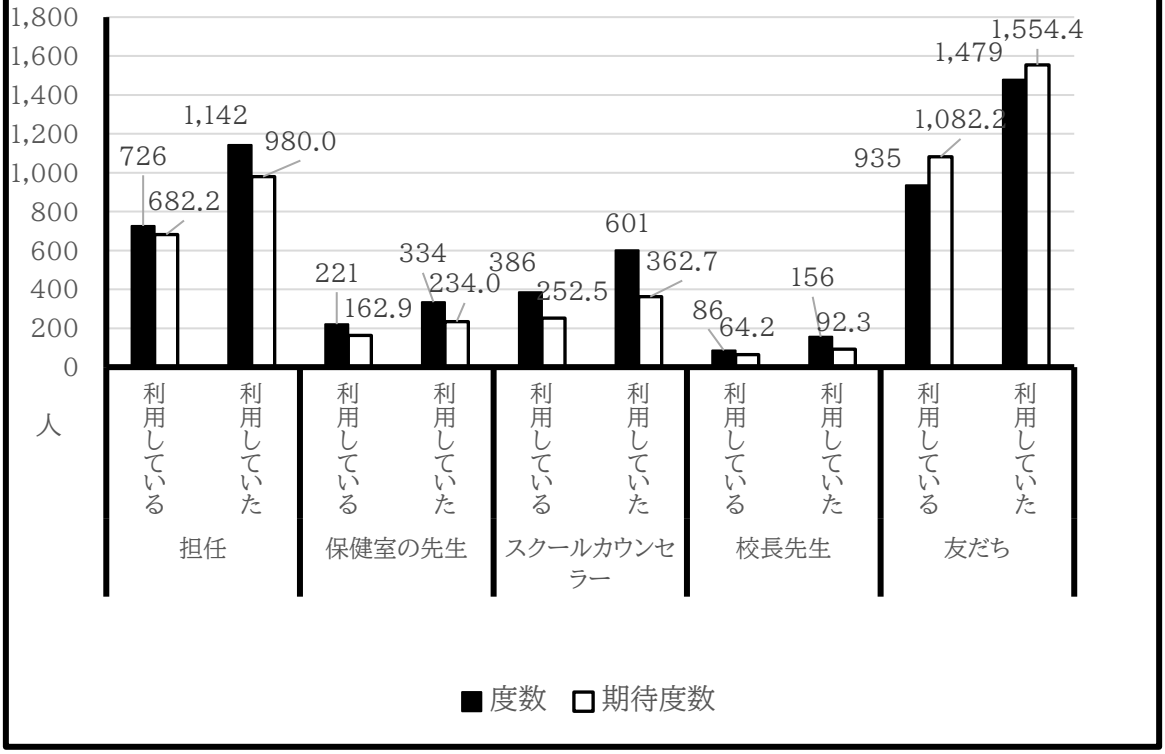
（２）各論４を踏まえ、「学校生活で最も大切にしていることが『特にない』」子ども（小学校高学年、中学校）は、「施設やサービスを１つでも利用していた、または利用している」からこそ、学校関係者への相談者数が期待度数より少なくなると予測する。

（３）「学校生活で最も大切にしていることが『特にない』」子ども（小学校高学年、中学校）は、「学校生活で困ったときに学校の中で相談したことがなく」、「施設やサービスも利用したことがない」と回答した人数が期待度数より多くなり、チーム学校（学校生活で困ったときに学校の中で相談したことがある）から漏れていると予測する。

小学校高学年
中学校

学校内の相談先×施設利用する子ども

各論５－表１



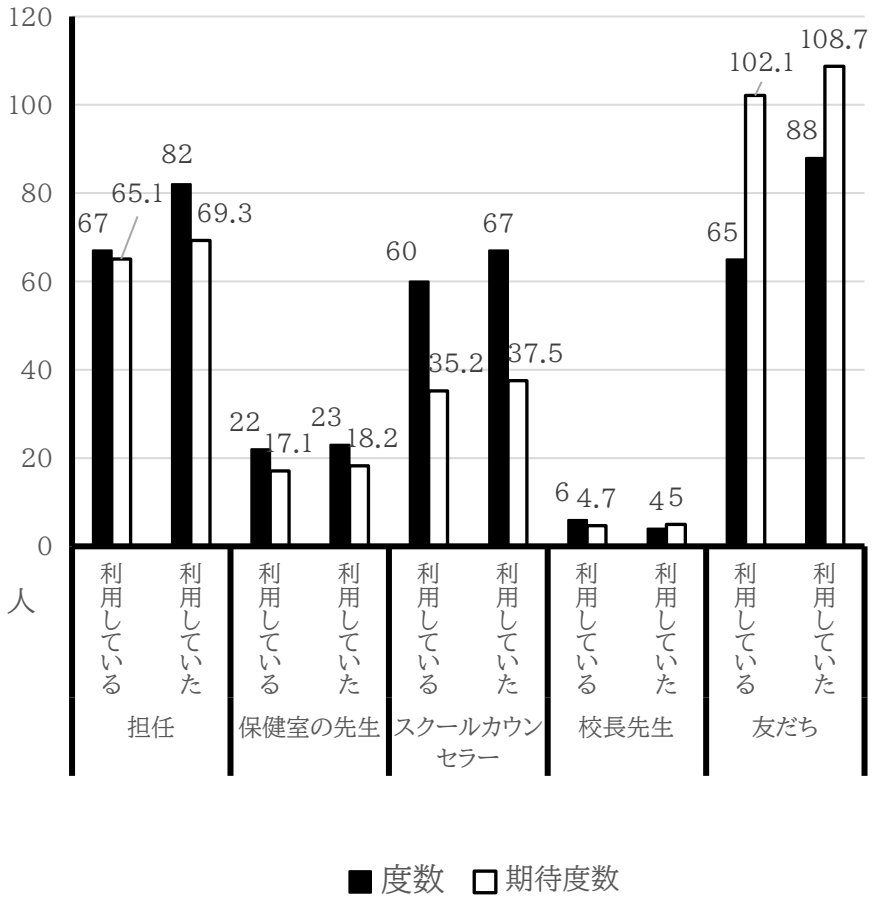
各論５－表１　分析結果

（１）「施設やサービスを利用している/利用していた」と回答した子どもは、担任や保健室の先生（養護教諭）、スクールカウンセラーなど、学校内で相談した度数（人数）が期待度数よりも多い。
（２）学校が、既に「チーム学校として機能している」ことが示唆された。

小学校高学年
中学校

学校生活で最も大切していることが「特にない」×
施設利用者　×
学校生活で困ったときに学校の中で相談したことがある

各論５－表２

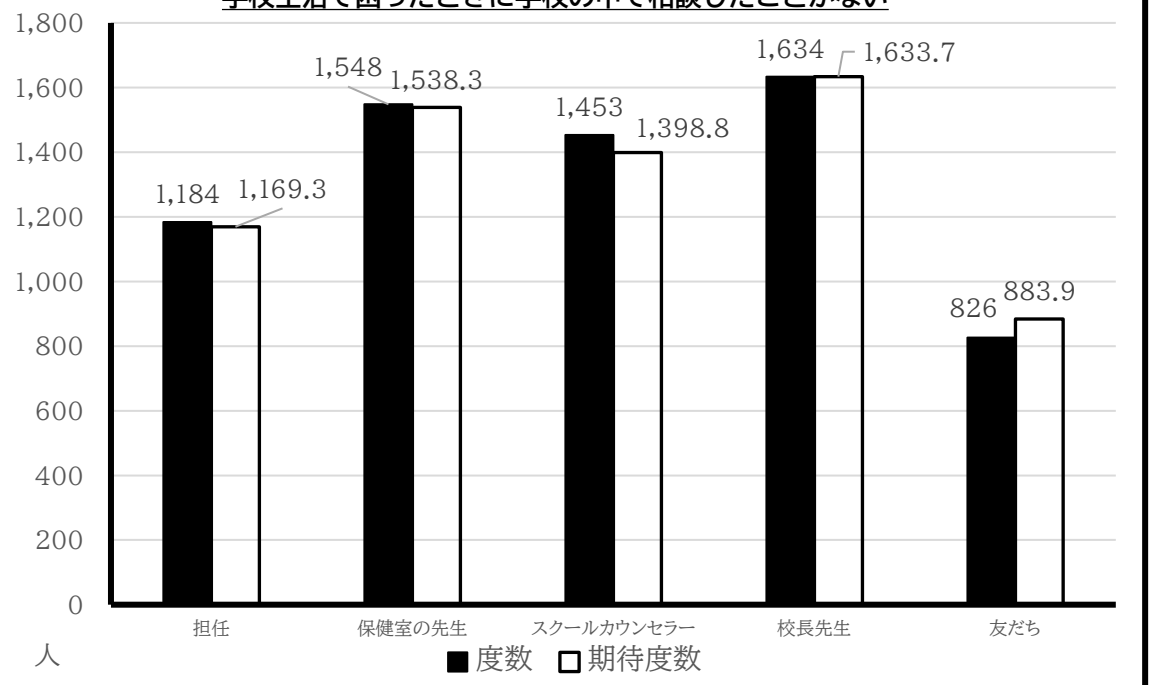


各論５－表２　分析結果

（１）「特にない」と回答した子どもでも、施設やサービスを利用してい（た）れば、学校内での相談先の度数（担任や保健室の先生（養護教諭）、スクールカウンセラーなど）が期待度数よりも多い。
（２）一方で、学校内での相談先としての「友だち」は、度数（人数）が期待度数よりも少ない。
（３）「特にない」と回答した子どもの相談先は、心理職に比重が偏っていることが示唆された。

小学校高学年
中学校

各論５－表３



各論５－表３　分析結果

（１）「学校生活で困ったときに学校の中で相談したことがなく」、「施設やサービスも利用したことがない」と回答した人数は期待度数より多くなる。
（２）「特にない」子どもは、「チーム学校」から漏れ、支えられていない可能性がある。

結論５　仮説5（1）（3）は概ね支持。（2）は不支持。一方で、チーム学校が機能している傾向もみられる。

１　所見

外部の支援サービスを利用している子どもは、先生やスクールカウンセラー（SC）にも相談できており、「チーム学校」が一定の成果を上げていることが示唆された。一方で、学校に価値を見出せない（学校生活で最も大切にしていることが『特にない』と答えた）子どもは、校内で孤立する分、学校外の地域とつながることで自分を守っている傾向がある。

しかし、最も深刻なのは、「学校に居場所がなく、外部サービスも利用したことがない」子どもたちである。この子どもたちは誰にも相談できず、支援の網から漏れてしまっている可能性がある。

したがって、学校は「学校内だけの連携」だけでなく、「学校外の地域」との連携を進めて子どもたちの孤立を防ぎ、気軽に相談のできる体制を整えていく必要がある。

（１）スクールカウンセラー（SC）や担任の負担軽減

悩みを持つ子の相談先が担任やスクールカウンセラー(SC)などに集中し、負担が偏っている現状を周囲が理解し、組織で支える体制が必要である。

（２）「情報の共有」と「役割の分担」

学校と地域が「押し付け合い」にならず、子どもを中心に据えた情報共有と役割の分担をする必要がある。その温かな仲介者がスクールソーシャルワーカー（SSW）ともなり得るかもしれない。

（３）学校外の地域にできること

学校以外の大人たちには、子どもが「未来」に希望を持てるような、憧れのモデルとしての役割が期待される。

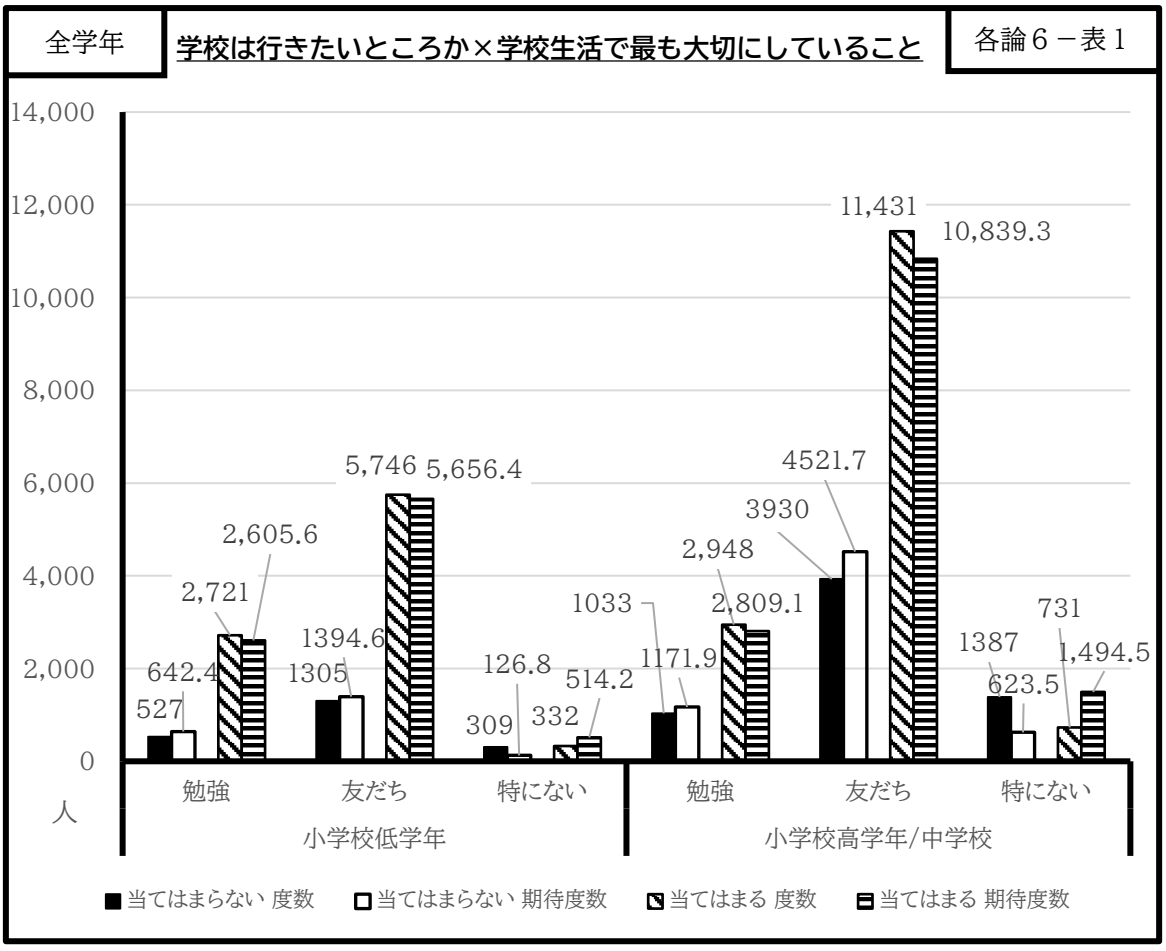
各論６　学校を子どもたちにとって「安心できるところ」「成長できるところ」に

仮説６　学校は子どもたちにとって「安心できるところ」「成長できるところ」になり得ていない。

（１）「学校生活で最も大切にしていることが『特にない』子どもは、「学校は『自分が成長できるところ』『安心できるところ』」と判断する人数が期待度数と比べ少ないと予測する。

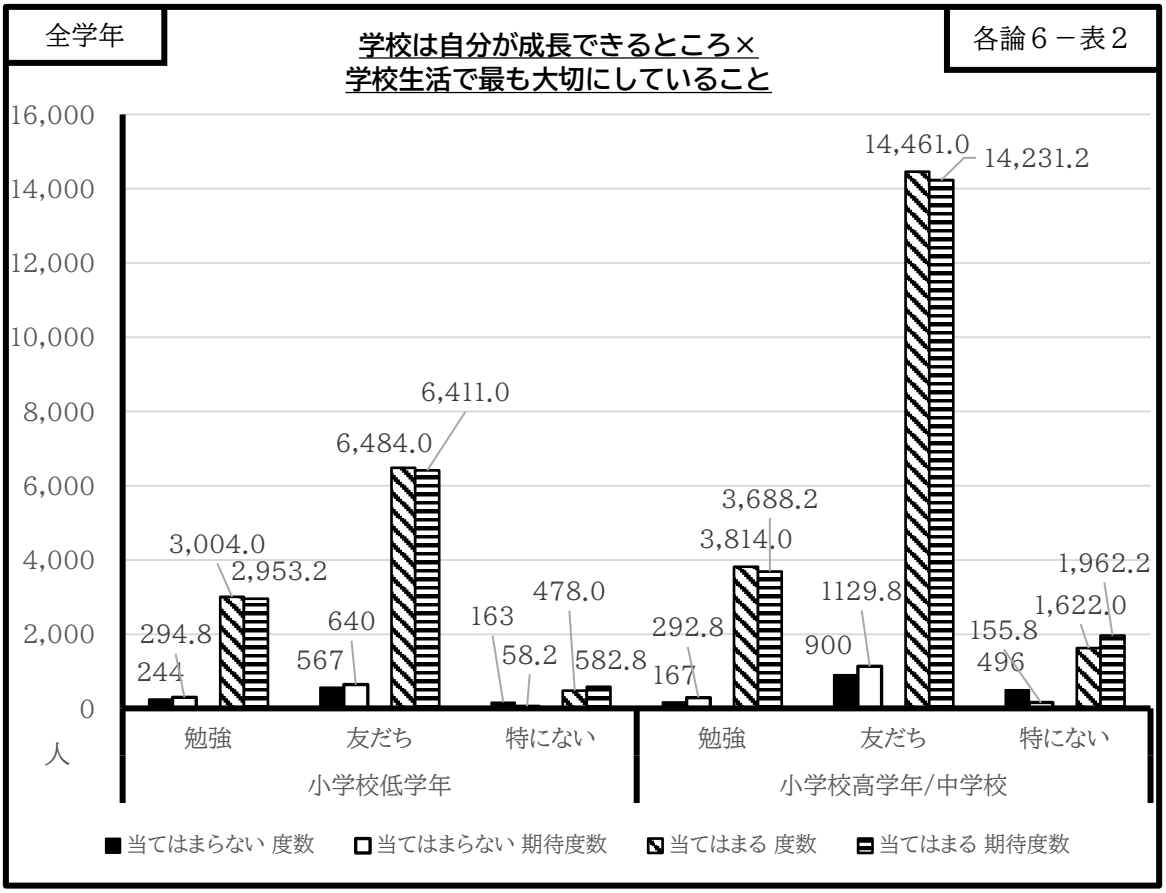
（２）（１）の予測どおりであれば、「学校生活で最も大切にしていることが『特にない』子どもは「学校に行きたくないと感じること」が多く、その具体的な理由（「学校の過ごしやすさ」「勉強」「友だちや先生との人間関係」「家族や家庭環境」「気持ちや体調」「その他」）を多く持つと予測する。

（３）（２）の予測どおりであれば、「学校生活で最も大切にしていることが『特にない』子どもは、「学校に行きたくないときに求めていることが『そっとしておいてほしい』」を選択する人数が期待度数と比べて多く、他者との関わりを拒絶していると予測する。さらに、「学校に行きたくないと感じる理由が無くなったとしても『それでも（学校に）行きたいと思わない』」を選択する人数が期待度数と比べて多いと予測する。



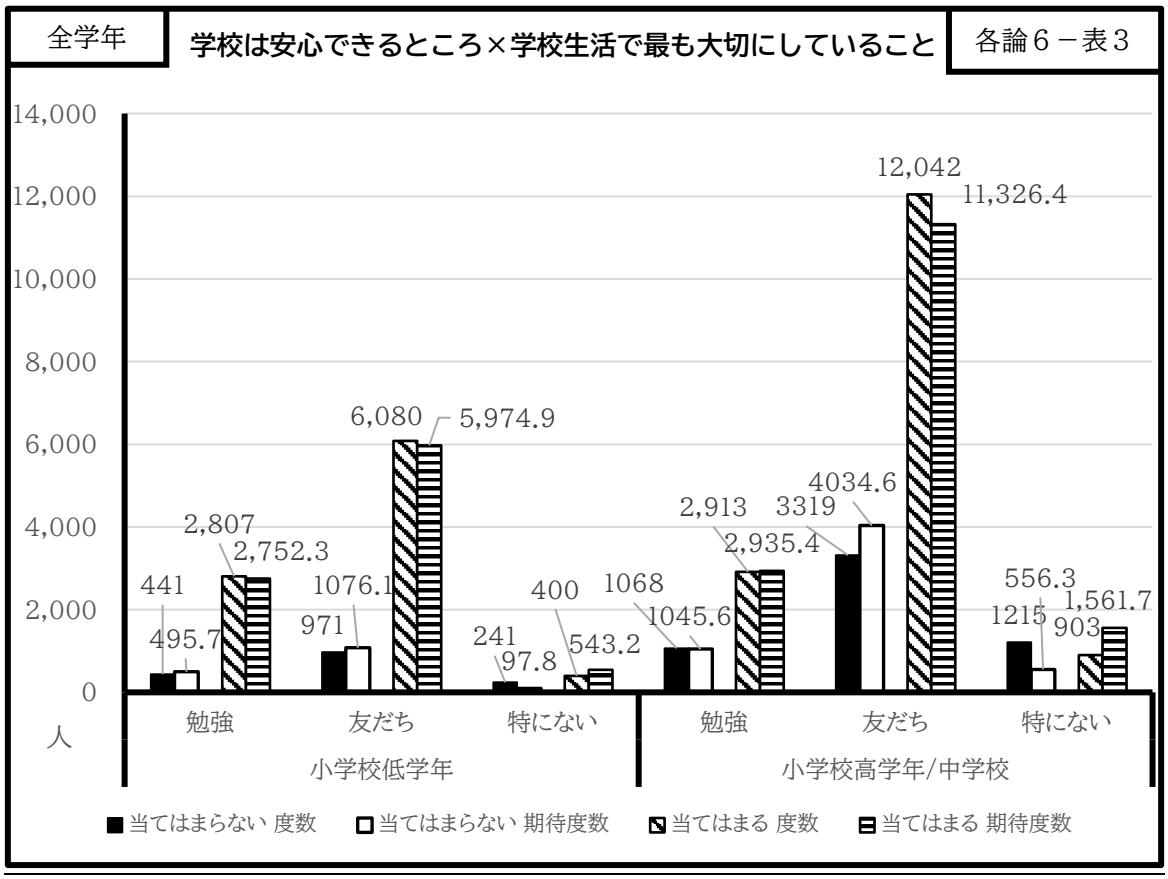
各論６－表１　分析結果

「特にない」と回答した子どもは、「学校は『行きたいところ』」と感じる度数（人数）が期待度数と比べ少ない。



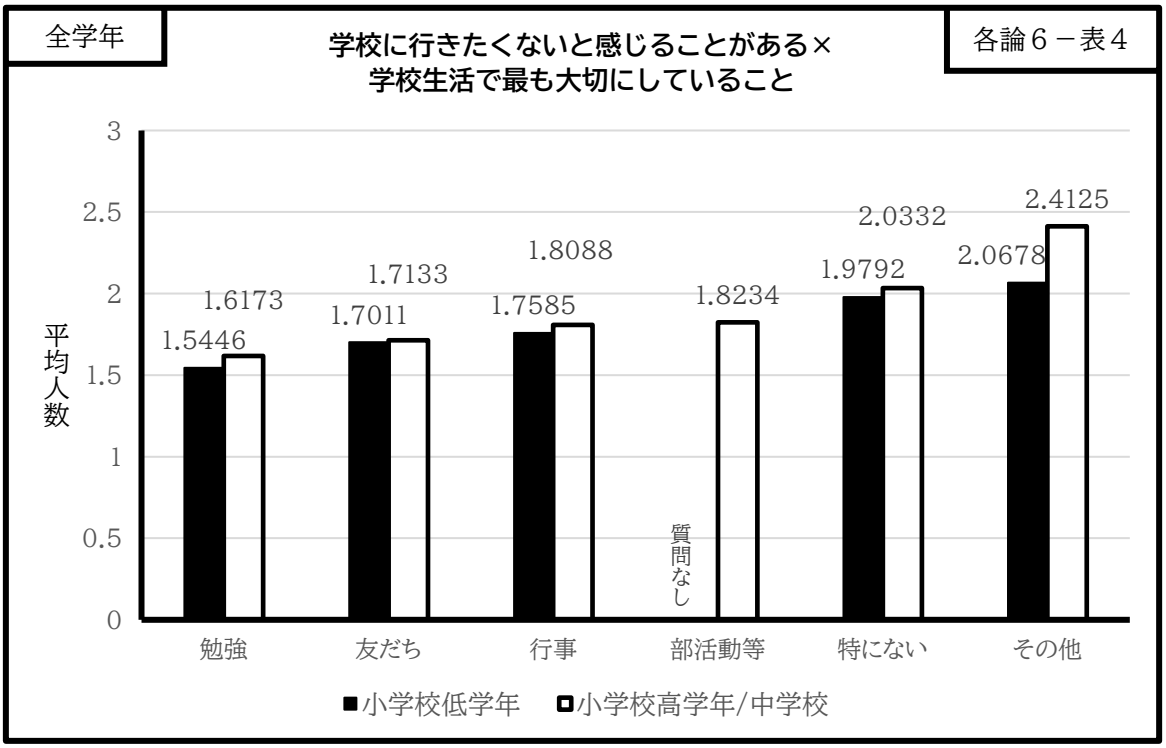
各論６－表２　分析結果

「特にない」と回答した子どもは、「学校は『自分が成長できるところ』」と感じる度数（人数）が期待度数と比べ少ない。



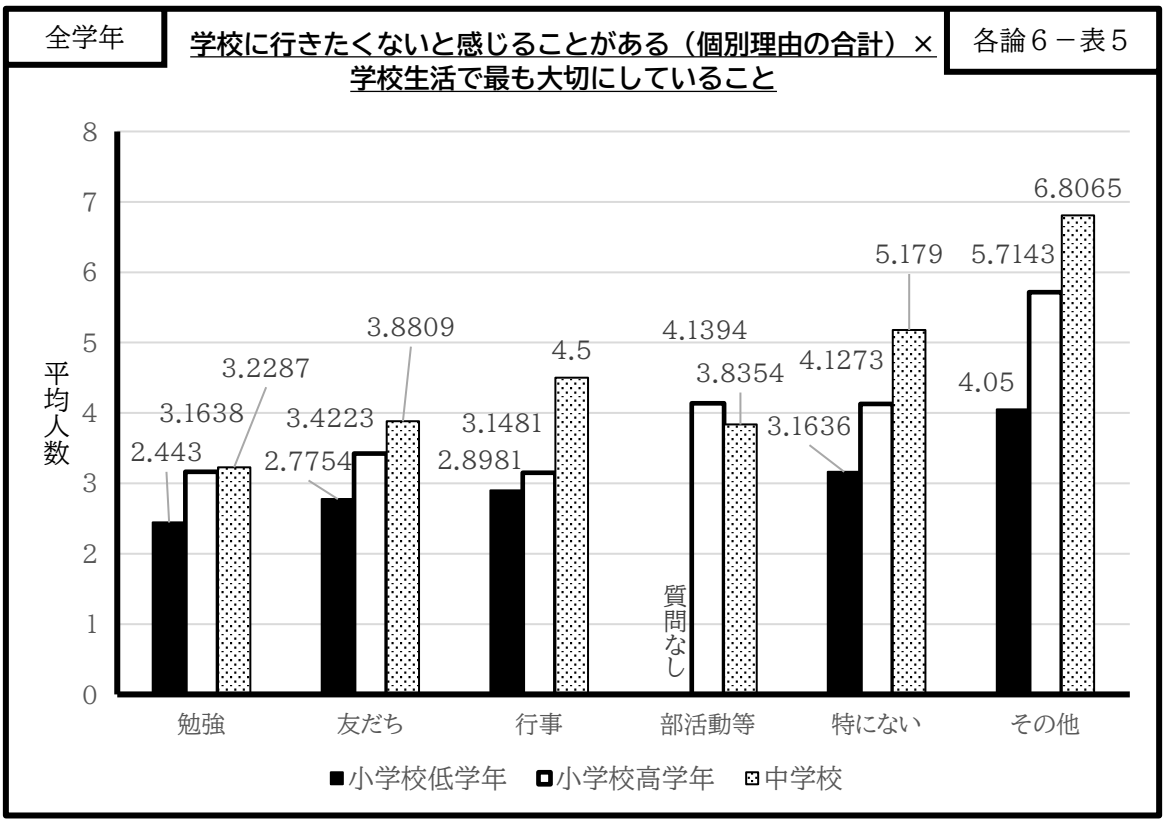
各論６－表３　分析結果

「特にない」と回答した子どもは、「学校は『安心できるところ』」と感じる度数（人数）が期待度数と比べ少ない。



各論６－表４　分析結果

「学校に行きたくないと感じることがある」と感じる平均人数は、「特にない」が「勉強」や「友だち」などと比べて多い。



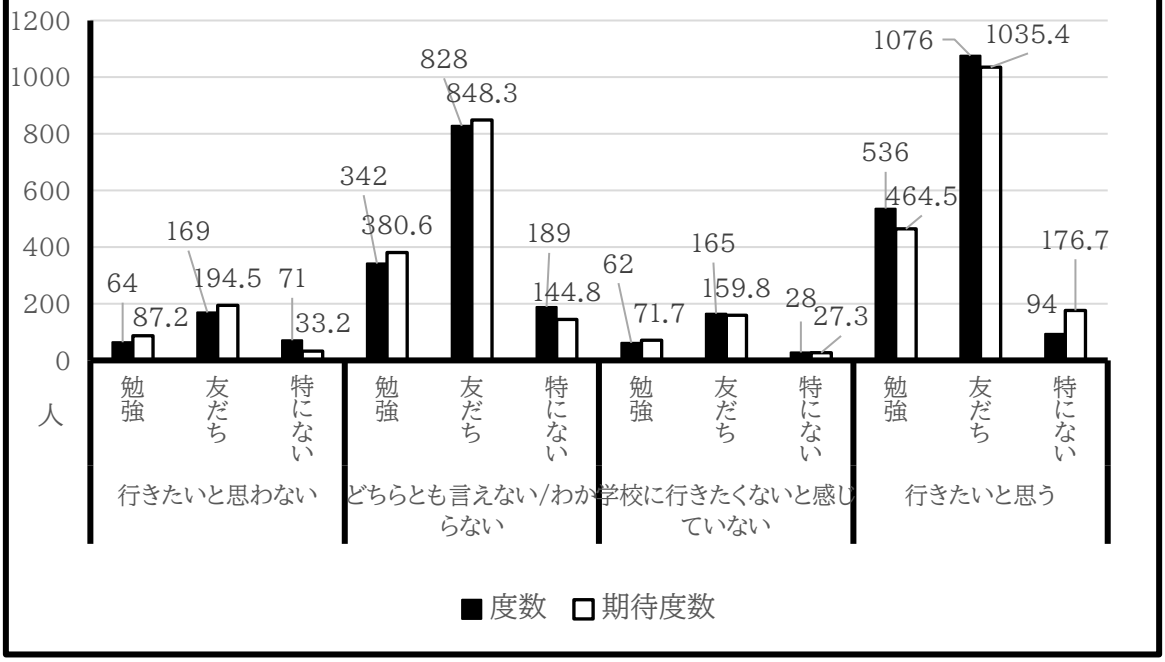
各論６－表５　分析結果

「学校に行きたくないと感じることがある（個別理由の合計）」と感じる平均人数は、「特にない」が「勉強」や「友だち」などと比べて多い。

小学校低学年

学校に行きたくないと感じる理由がなければ学校に行きたいと思うか×学校生活で最も大切にしていること

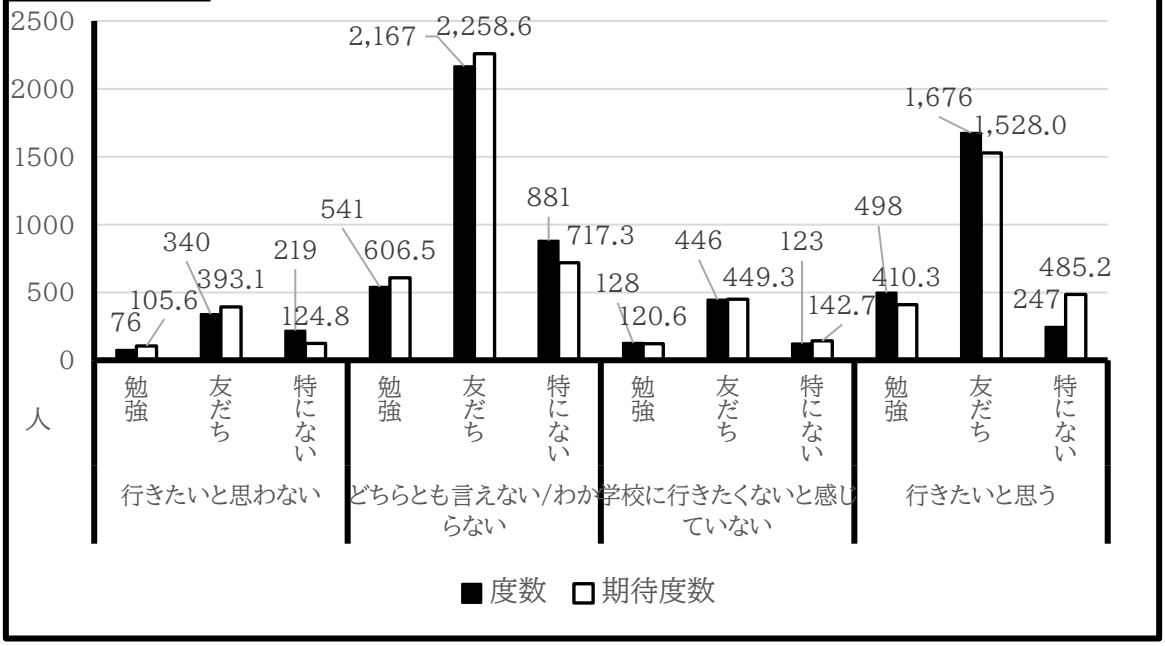
各論６－表６



小学校高学年
中学校

学校に行きたくないと感じる理由がなければ学校に行きたいと思うか×学校生活で最も大切にしていること

各論６－表７



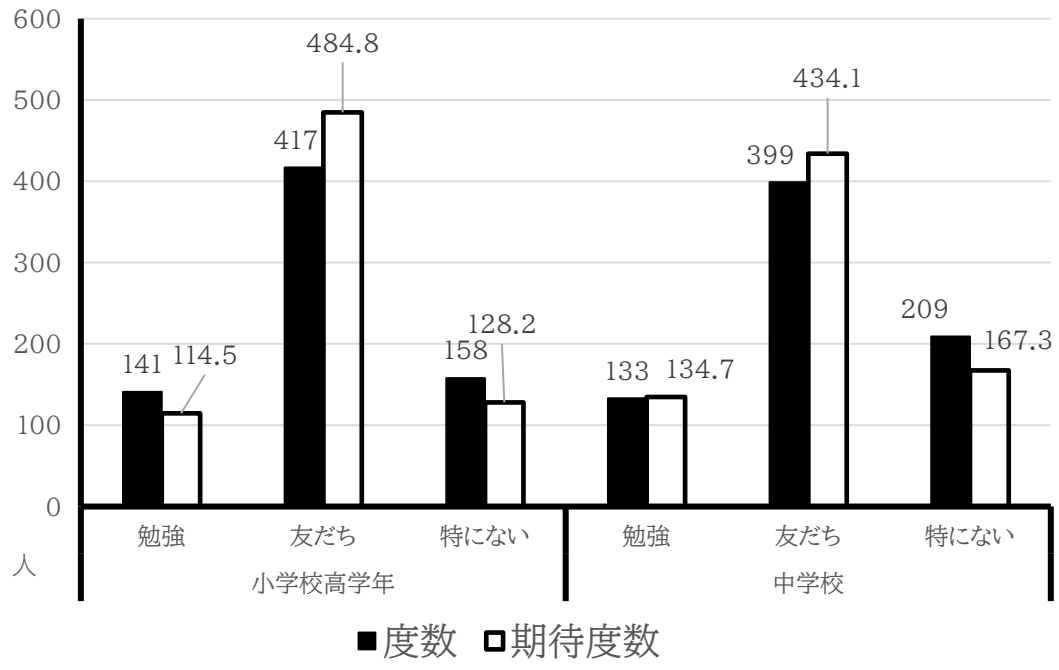
各論６－表６、７　分析結果

（１）「特にない」と回答した子どもは、「行きたいと思わない」度数（人数）が期待度数と比べて多い。逆に、「行きたいと思う」度数（人数）は期待度数よりも少ない。
（２）「勉強」「友だち」と回答した子どもは、「行きたいと思う」度数が期待度数と比べて多い。

小学校高学年
中学校

学校に行きたくないときに「そっとしてほしい」×
学校生活で最も大切にしていること

各論６－表８



※　小学校低学年は統計的な差は認められなかった。

各論６－表８　分析結果

「学校生活で最も大切にしていることが『特にない』子どもは、「学校に行きたくないときに求めていることが『そっとしておいてほしい』」を選択する人数が期待度数と比べて多い。

結論６　仮説6（1）（2）（3）を概ね支持。学校は子どもに「安心」と「成長」を提供できる場所にならなければならない。

１　分析者所見

分析から、学校に大切にしたいことが「特にない」と感じる子どもは、学校を「自分を成長させてくれる場所」とも「安心して過ごせる場所」とも思えていない実態があると分かった。この子どもたちは勉強・友人関係・心身の健康に多くの悩みを抱えており、「行きたくないときは、そっとしておいてほしい」と、周囲との関わりを拒絶する傾向にある。

学校（および地域）は、こうした子どもたちが「ここは安心できる」「自分も成長できる」と感じ、いつか「行きたい」と思えるような場所へと変わっていく必要がある。

（１）個別ニーズに応える居場所づくり

ア　学びにおける「同調」のハードルを下げる

他者と違うこと、失敗は学びであること（悪いことではない）、一人ひとり進むスピードが違っていいことを伝え、伴走支援を行う。

イ　環境の柔軟性

集中したい子のためのイヤーマフ利用や、その子に合わせた適切な学習量（宿題・課題）の調整を行う。子どもの動機づけや学習力に合わせた学習の視点も一つ。

ウ　集団活動の工夫

集団が苦手な子には一歩ずつ慣れるよう個別的な関りから始め、それぞれにできること、できないことの差はあり得るという多様な子どもが共に学ぶ「意義」を大事にできるクラスづくりを行う。

（２）「友だち」関係の土台をつくる

自分も相手も大切にする自他尊重の教育が求められる。

意見が違う他者とどう付き合うか、衝突したときにどう解決するかを具体的に学ぶ機会をつくる。つまり、大人が関わる前に、子どもたち同士でも価値観の違いを受け入れられる対人関係能力を身に着けられるようにする。

（３）「心と体の健康」を守る

学校を、心身の健康の保持・増進できる居場所にするべく、空腹が満たされる等、生理的状態を安心させられる居場所（生理的欲求）、空間として安全・安心な場所（安全・安心の欲求；主にクラスであるが、別室、保健室等含む）、緊張せずに過ごせるクラスや友達関係（所属の欲求）、自身の好きなこと楽しいことを大事にできる心理的居場所（承認の欲求）、自分自身をより高めたり、受け入れられたりする高度な成長の居場所（自己実現の欲求）等ができるような、大人側の学校づくりやそのフォロー体制を整える。換言すれば、SNS・ゲームでは体験できない、またはそれらをよりリンクさせる

ような「現実の生活が楽しい」と思える時間をプロデュースする。

（４）大人側の備え～子どもと向き合う「技量」と「時間」の創出～

ア　「時間」はみんなで創り出す

教員の努力だけでは限界がある。学校・保護者・地域・行政が互いの立場を尊重し、「気遣いと配慮」をもって役割を分担することで、教員が子ども一人ひとりと向き合う時間を生み出す必要がある。

※　教員数や働き方改革といった形式だけでなく、「中身」が伴っているかが重要。

イ　「関わりの質」を高める（技量の創出）

子どもが「自分のことを好きになれる」ような大人の関わりを日常の中に組み込むことが重要である。個別面談の時間だけでなく、授業中や休み時間、放課後といった日常のあらゆる場面で、カウンセリング（受容）やコーチング（称賛・質問）のスキルを活かした「有意義な関わり」を積み重ねていく必要がある。

以上、ここまで「夢（将来の楽しみ）や希望を信じる視点」、「子どもたちのウェルビーイング向上の視点」で所見を述べてきた。

総論１～２、各論１～６を踏まえ、社会全体で子どもを支えて育てあげていくという意識を共有し、ありのままの子どもを受け入れていく姿勢そのものが、不登校の未然防止に繋がるものと考える。

最後に、足立区の基本方針である「夢や希望を信じ生き抜く人づくり」に向けて、「夢と希望の推進モデル」を示すこととしたい。

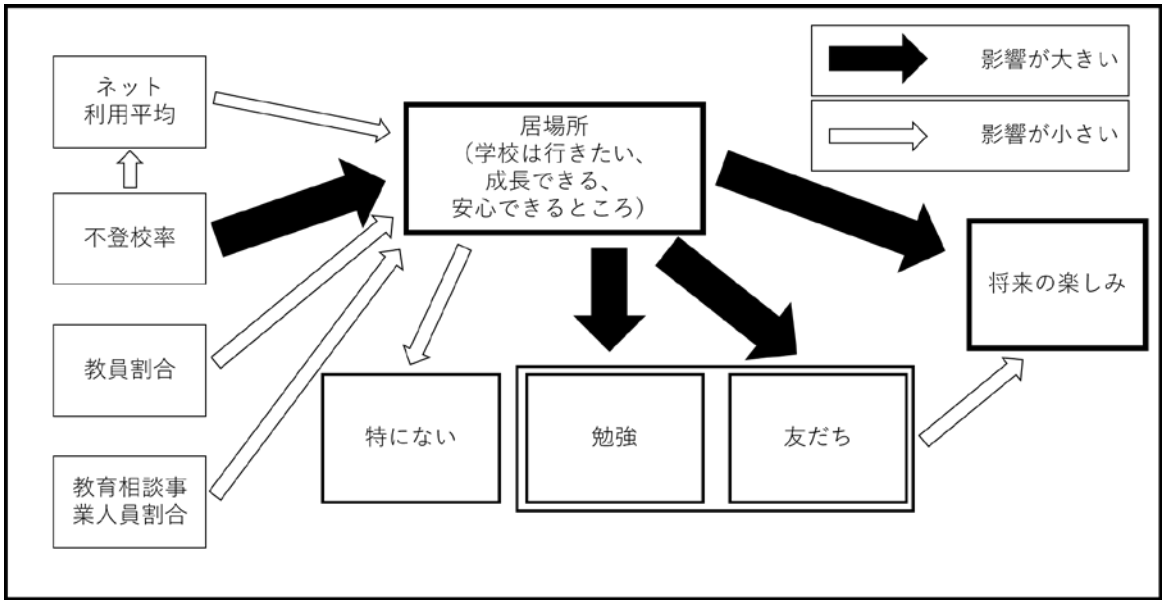
夢と希望の推進モデル

仮説　子どもたちの夢と希望を応援するには、「居場所」が寄与する。

（１）子どもたちに合った、行きたい、成長できる、安心できる「居場所」を作り、「居場所」を提供することは、子どもたちの生きる基盤となると仮定し、「学校生活で最も大切にしていること」、「自分の将来についてどのように感じているか」に寄与すると予測する。

（２）「学校生活で最も大切にしていること」のうち、「勉強」と「友だち」の選択が「自分の将来についてどのように感じているか」に肯定的、「特にない」の選択が否定的に寄与すると予測する。

（３）教職員や教育相談事業の人員を増やすほど、子どもたちのウェルビーイングを増やし、不登校率が高いほどインターネット利用が多いと予測する。



夢と希望の推進モデル　分析結果

（1）「居場所」が将来の楽しみを持つこと、勉強、友だちに影響を及ぼしている可能性が示された。「居場所」を提供することは、子どもたちの生きる基盤となり、「学校生活で最も大切にしていること」、「自分の将来についてどのように感じているか」に寄与する。
（2）「学校生活で最も大切にしていること」のうち、「勉強」と「友だち」の選択が「自分の将来についてどのように感じているか」に多少ながら肯定的、「特にない」の選択が多少ながら否定的に寄与していることが示された。
（3）教職員や教育相談事業の人員数は、統計的に、子どもたちのウェルビーイング向上に影響が少なく、不登校率が高くてもインターネット利用への影響が大きいわけではなかった。

結論　仮説（1）（2）は概ね支持。（3）は不支持。子どもの「居場所」が重要

1　所見

（1）「居場所」が子どもの生きる基盤になる

子どもにとって、自分らしくいられ、成長を実感できる「安心できる居場所」があるかどうかは、心の発達に大きな影響を与える。

学校生活において「友だち」との関係を大切に思えるようになったり、たとえ学校に馴染めなくても「自分の将来が楽しみだ」と前向きに捉えられるようになったりするのは「安心できる居場所」があるからで、「居場所」は子どもが未来を信じて生きていくための「基盤」であると言えよう。

したがって、「学びの場」でありながら、子どもが安心していられる「居場所づくり」を重点的に進めていくことが求められる。

（2）「不登校」を否定しない、新しい視点

現在、不登校の子どもは増え続けている。私たちは「学校に行けなくなった後、どうするか」という事後対応に注目しがちだが、本当に必要なのは不登校の増加を止めるというより前に、子どもたちが自身の将来を信じることのできる「居場所」を構築していくことである。

単に「学校に来させること」を目標とするのではなく、「居場所」を学校の内外に構築していき、子どもが自分の将来に希望を持てるように取り組んでいった方がよいだろう。それが不登校の軽減に結び付くのである。

（3）不登校は「だめ」なことなのか？

不登校という選択を「良い・悪い」で判断してはならない。大切なのは、

子どもがどのような選択をしてもその隣で歩み、その決断に至った背景を大人側が理解しようと努める姿勢である。

　不登校の理由は、一人ひとり異なり、学校に行かないという決断をしているのは、他ならぬ「子ども自身」である。大人の価値観で正解を押し付けるのではなく、「居場所」と同じく子どもが自分の将来に希望を持てるために、子どもの意思を尊重して信頼関係を築いていかなければならない。